

人種という境界

—19世紀前半ヨーロッパの人種言説とネイションフッドの形成—

李 孝 德

1. はじめに：人種カテゴリーの混乱

人種（race）は、一般的にヒト（*Homo sapiens*）をその形質的特徴にしたがって下位分類した生物学的概念だと見なされることが多い。たとえば日本の公教育の教科書では、人種は相対的な概念で、厳密なものではなく、科学的な根拠もないと留保が示されつつも、形質（肌の色）に準拠したコーカソイド（白色人種）、ニグロイド（黒色人種）、モンゴロイド（黄色人種）が世界三大人種として説明されている（伊藤 2021）。しかしナチス・ドイツの人種政策において理想的人間像とされたがゆえに今なお悪名高いアーリア人（英：the Aryans, 仏：les Aryens, 独：die Arier）は、もともとはインド・ヨーロッパ語族の祖語を話していたとされる（空想の）言語共同体＝民族¹⁾に対して名づけられたもので、決して生物学的な身体的特徴を共有する人間集団のことではなかった。また、ヨーロッパの古典古代および中世の史書に記述された諸民族が人種とされることがあった。さらには英國人種や
ナシオン・フランセーズ
フランス人種のように、^{ブリティッシュ・レイス}諸国民が、たとえばスキタイ人種やケルト人種、現在でも使われることのあるユダヤ人種のように、人種として論じられることもあった。実際日本でも、戦前には「日本人種」が学術的に議論された（工藤 1979）。つまり今日ではその科学的有意味性は否定されているとはいえ（Brace・瀬口 2005），生物学的な概念とされてきた人種は、その実、母語話者集団（言語共同体）、歴史的・文化的集団である民族、政治的集団である国民（ネイション）などとカテゴリー錯誤を犯しつつ使われてきた歴史を持つ。

こうしたカテゴリー錯誤は決して過去のものではなく、現在においても制度的に継続している。たとえば、2020年に実施された米国国勢調査（US Census Bureau 2021）では、「白人」「黒人またはアフリカ系アメリカ人」「アジア系」「アメリカン・インディアン／アラスカ・ネイティブ」「ヒスピニック／ラティーノ」など、形質、出自地域、言語的文化圏といった異なる分類軸による人口集団カテゴリーが、選択肢として並置された。また、コロナワクチンの有効性を評価する臨床研究において、こうした人種・民族・出自地域に基づく錯誤した区分が、統計的比較の単位として利用された²⁾。いずれも価値中立性が前提される領域でありながら、歴史的な人種分類のコノテーションが使用された。つまり人種は科学的な効力を

失ったとされる今日でも、纏綿と社会を規定しているのである。

このようなカテゴリー錯誤は、偶発的な誤用ではなく、特定の歴史的条件のもとで形成され、継続してきたものである。本稿では、それを単なる認識上の過誤ではなく、制度的実践と結びついた歴史的産物として捉え直すことを試みる。そしてその際の鍵となるのが、近代的な集団意識としてのネイションフッド (nationhood) の形成である。そこでは race が人種を意味するに至る語義変化をたどり、続いて人種概念が 19 世紀前半のヨーロッパにおける比較言語学、歴史学、生理学、民族学といった諸学の知と交錯しながら、ネイションフッドと結びつき、どのように制度的に位置づけられていったのかを明らかにする。さらに、19 世紀において都市下層階級や貧民が文化的・身体的特徴をもとに人種化され、社会内部の排除と査定の対象へと組み込まれていく過程を論じる。こうした知と制度の交差のなかで構築された人種概念の ^{ボリティクス} 政治を歴史的文脈に即して検証することが、その目的である。

2. 近代的「人種」概念の形成

race という語がもともと意味していた「血統」や「家系」という語義が、近世以降どのように変化し、近代的な「人種」概念へと至ったのかは、当時の辞書・辞典を通じて確認することができる。1538 年に刊行された仏羅辞書には race の項目はないが (Estienne 1538), 1549 年の増補版には race の項目が現れる (Estienne 1549: 411)。以降、16 世紀を通じて仏羅辞書では、race の語源はラテン語の Radix (根源、根) の属格形から、中音節の脱落 (syncope) から生じたもので、extraction (抜去、素性・家柄) を意味するとされている。レファラントとして、家系・出自・家族に結びついたラテン語の諸単語が示されて説明されるが、生物学的分類や民族的区別に関わる説明は見られない。しかし 1573 年刊行の仏羅辞書およびその増補版 (Nicot 1573: 601; 1584: 601; 1593: 778) では、人間だけでなく家畜類に対しても「品種 (race)」が使われるとあり、分類概念にはなっていないが、種類・様式のような分類的用法が加わり、人間や動物（家畜）に共通する「系統」の意味で使われるようになっている。

アカデミー・フランセーズ辞典の第 1 版 (1694), 第 2 版 (1718), 第 3 版 (1740), 第 4 版 (1762), 第 5 版 (1798), 第 6 版 (1835), 第 7 版 (1878), 第 8 版 (1932-5) 各版の race の説明、語源など³⁾ は上述の仏羅辞書とほぼ同じだが、「高貴な血統 (race noble)」「良い家系 (une race de gens de bien)」「呪われた家系 (Race maudite)」といった使い方が第 1 版から示され、社会的・道徳的な評価と結びついていることがわかる。興味深いのは、今日的な人種を意味する説明はないものの、「フランス王家の三王朝 (Les trois races de nos Rois)」〔メロヴィング、カロリング、カペーに相当〕のような高貴な血統に対する使い方が示される一方、「ユダヤ人の血を引くと疑われている人物 (C'est un homme que l'on

soupçonne d'être de race Juive)」というようなユダヤ人に対する血統的な（否定的）使用が記録されていることである。ただし第7版と第8版になると、「血統」の説明に加えて、「広義には、同じ国（pays）に起源を持ち、顔の特徴や外見の形態が似ている人々の集団を指す。コーカサス人種、モンゴル人種、ユダヤ人種、マレー人種」や「また、人類の種における一定の変異を指す。白色人種、黒色人種、黄色人種」といったように、今日的な人種の意味——地政的および形質的分類——が説明項目に含まれるようになる。ここから読み取れるのは、18世紀から19世紀初頭、すなわち啓蒙期において、raceという語が今日の「人種」に近い意味すなわち人間の身体的特徴や集団的属性を分類する語彙へと変化したことである。

実際、フランス啓蒙の思想家ドゥニ・ディドロと数学学者・物理学者ジャン・ル・ロン・ダランベールが中心となって1751年から1772年にかけて編纂した『百科全書』のraceの項目では、以下のように説明されている。

この語は、同じ家族に生まれた人々、または同じ祖先から出た人々すべてを指す。また、動物や植物にも用いられる。たとえば、「ブルボン家の系統」「メディチ家の系統」「バルブ種の馬」「獵犬の品種」「硬質小麦の品種」などと言う。人間の中には、肌の色、顔立ち、体格、その他の外見的特徴によって区別されるraceが存在する。博物学者たちは、こうした特徴に基づいて人類をいくつかのraceに分類してきた。しかしながら、この分類は恣意的なものであり、自然の中に確固たる根拠があるわけではない。（Jaucourt 1765: 740）

この記述には、フランスの博物学者ジョルジュ＝ルイ・ルクレール・ド・ビュフォンの見解——人種とは気候・環境によって変化する相対的な変異（variété）のことであるため、形態の構造的類似性に基づく分類は思弁的なものにすぎない（李2023: 12-5）——が反映されて、人種分類は示されていないが、raceがすでに博物学者たちによって人間を分類するカテゴリー概念となっていることがわかる。すなわちフランス啓蒙期の博物学においてraceが特殊ヒトに関わる分類概念となり（李2023），現代にまで至る「人種」概念の形成を決定づけた。このように啓蒙期におけるraceの語が、血統や系譜を示す用法から、分類学的な意味を帯びる語へと変容していった背景には、啓蒙期の博物学がヨーロッパにおける世界認識を再構築しようとする目的があった。

そもそも人間の生物学的分類の嚆矢とされるカール・フォン・リンネの人間の分類は、ヒトに対して伝統的な植物分類の手法を援用して体系化し、世界の人々の多様性をキリスト教的地理認識に基づく四大陸——ヨーロッパ、アジア、アフリカ、アメリカ——の区分によって亜種（*homo sapiens*の下位区分）として分類するもので、伝統的な形態学的分類の視点からの整理であった（李2023: 12-3）。

これに対して、raceという語を初めてヒトの博物学的な分類に用いたビュフォン⁴⁾は、

人種という境界

リンネの形態学的な分類を思弁的であるとして批判し、人間の多様性を「同一種内における気候や環境の差異によって生じる変異」とした（李 2023: 13-7）。ただしこの変異は、一過性のものではなく、世代を超えて継承される相対的に不变で系譜的なものとされた。ビュフォンは、人間における変異をスペクトラムとして捉え、そのなかで観察者が恣意的に区切りを設けて諸集団に分類したものが race にほかならないとした。つまりビュフォンにとって、人種は観察者の視点によって区別される、今日でいう人為的分類概念にほかならなかった。ビュフォンが人種（race）を用いながらも人種分類を明示しなかったのは、こうした理由によっていた。

ただしビュフォンの「人間における変異のスペクトラム」は決して価値中立的ではなかった（李 2023: 14-5）。ビュフォンにとって、人間の変異はヒト本来の形態である「白人（les hommes blancs）」が、気候や環境によって「ニグロ（les Nègres）」〔蔑称だが、原著の表現を忠実に示すために、以下そのまま記載〕へ変化していく連続的なグラデーションであり、そのグラデーションは文明度・道徳性とも対応していた。すなわち、ヨーロッパ人は人間にとて最適な環境である温帯に住むがゆえに、最も文明化された本來的なヒトである「白人」であり、熱帯に住む非ヨーロッパ人は悪しき環境に住むがゆえに最も文明度の低い「ニグロ」とされた。このように、ビュフォンが人種分類に race という語を導入した背景には、先に見たように、race には社会的身分の高貴さや卑賤さを受け継ぐ系統に関わる道徳的觀念と、家畜の品種改良における遺伝的な体軀の連続的变化の觀念の両方を持つことがあった⁵⁾。つまり、race は人間の多様な身体的変異を連続的・系譜的に捉えると同時に、その変異を文明的・道徳的グラデーションへと変換するカテゴリーの用語として好適だったのである。

こうしたカテゴリー概念が博物学に導入された背景には、大航海時代以降の地理的“発見”と植民地拡大がもたらした世界の多様な人々との遭遇が、それまで聖書や古典古代の文献に依拠していたヨーロッパの認識枠組みを動搖させ、従来の枠内では処理しきれない〈他者〉を説明・分類する必要性が高まったことがあった。宗教改革や科学革命を経て、観察と実証に基づいて自然を把握しようとする近代合理主義的な認識論が形成されて博物学も発展し、従来は神学的に秩序づけられていた世界に対し、自然誌的・分類学的な思考様式が導入された。そしてこの新たな世界認識の枠組みにおいて、人間もまた一つの生物種として再定義され、既存の分類手法が人間に転用されることで、その多様性を身体の形質に基づいて類型化するための分類学が博物学として発展した。

とはいっても、啓蒙期に発展した人種論・人種分類が対象にしていたのは、基本的に非ヨーロッパの人々だった。啓蒙期の人種言説は、古典古代の文献や聖書などに基づく伝統的な世界觀が近代合理主義的な世界觀に上書きされるなか、キリスト教を基盤とする神学的なヨーロッパ中心主義を、非ヨーロッパへの進出と植民地支配を背景にした文明論的なヨーロッパ中心主義に鋳直し、増大し続ける未知の人々とその情報を自らの新たな世界觀に体系的かつ合

理的に包摂して、秩序付けるための認識論だったからである（李 2023; 2024a）。しかしこの人種分類は19世紀に入るとヨーロッパへと反転し、ヨーロッパ（人）自身に再帰して細分化が進むことになった。すなわち、「人種」は非ヨーロッパに対する差異の語彙としてだけでなく、ヨーロッパ内部の言語的、民族的、階級的差異を系統化して階層化し、ネイションフッドの境界と正統性を定義するための語彙としても用いられるようになっていくのである。

3. 比較言語学とアーリア神話：諸民族の言語的系統化

19世紀端緒に誕生した比較言語学（当時は比較文法）は、諸言語に系統や類型を見出し、それらの祖語を構想する議論を生み出した。そしてその構想は、諸言語の話者の系統と連続性およびそれらの祖語の話者（言語共同体）についての空想も生み出すことになった。

比較言語学自体の成立は、1786年、インド・カルカッタに判事として赴任していた東洋学者・言語学者の英国人ウィリアム・ジョーンズが、サンスクリットは古典ギリシア語、ラテン語と共に起源を持つ可能性を語形の歴史的変化の共通性から指摘したことに端を発する。ただしこうした言語の共通性が人口に膚浅するようになったのは、ジョーンズ自らが編集する『アジア研究（Asiatick Researches）』の創刊号にその講演（Jones [1786] 1788: 415-31）が掲載されて以降のことである（風間 1978: 14）。ジョーンズ自身は聖書に由来する言語起源の一源説を信奉していたし（高橋 2002: 66），研究者としてはインド学の領域を出ることなく、この仮説は本人によって深められることはなかったため、彼自身の影響力は限定的だった。

しかしその後ジョーンズの“発見”を引き継ぎ、諸言語の系統や類型を発展させる研究者が出現して、言語研究に根本的な革新がもたらされた。ドイツ・ロマン派の文学者・翻訳家カール・ヴィルヘルム・フリードリヒ・フォン・シュレーゲルである（ドイツロマン派の中心人物であった文学者・哲学者・文献学者のアウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲルの弟）。シュレーゲルは、初期ロマン派の運動が退潮するとパリに活動の場を移して古代研究を始め、その後ケルンに戻るとその成果を『インド人の言語と英知』（Schlegel 1808）として刊行した。彼は、その第1巻「言語編」で、ジョーンズの議論を敷衍し、サンスクリットとギリシア語、ラテン語、ゲルマン諸語、ペルシア語との親縁関係を示すことで、比較文法（後の比較言語学）を創始することになったが、この研究は言語学の領域を超えて、ヨーロッパの知的社会に大きな衝撃をもたらした（Poliakov 1971: 256-9）。

比較文法は語族という言語単位における語形の歴史的変化から諸言語を系統化するもので、シュレーゲルはサンスクリットという人類英知の原初の産物から派生（類落）してきた個別の言語現象を解釈し（シュレーゲルはこれらの個別言語をサンスクリットからの派生によってその美質を失ったものと考えた）、その親縁性を明らかにしようとした。ただしその「立

人種という境界

場は、個々の言語の時間軸上の前後関係を確定し、しかもそこに意味連関を見ようとするものである。つまり、彼が言語に求める歴史性とはさまざまな言語が織りなす系統を、一つの有機的な連続として俯瞰できる枠組みそのものなのである。そしてその内実は、ひとことでいえば、一種の退化論であった」(三谷 2007: 140)。この時代は、言語をその話者から分離して考えることがなかったため、シュレーゲルはこの言語理論を話者に関わる人類学的な観点（どういう人々が話していたのか）から説明した。こうして（ヨーロッパ諸語よりも古いと考えられたがゆえに）サンスクリットを始原の言語に設定する比較文法によって作られた言語的な語族の単位と系統による類縁性は、そのままその言語の話者集団（民族）と系統の類縁性にスライドして、言語論は民族論と混線していった。たとえば次のヘーゲルの言明などは、民族と語族の混線を示す恰好の例だろう。

二十数年来のサンスクリット語の発見と、サンスクリット語とヨーロッパ語のつながりの発見は、新大陸の発見にも比すべき歴史上の大発見です。この発見は、とくにゲルマン民族とインド民族のむすびつきを示唆しますが、言語という民族生活に密着した場面でのつながりだけに、両民族のむすびつきをうたがうことはできません。現在でもなお、国家はおろか、社会すらも形成しないまま長く存在していることの知られる民族があります。また、わたしたちの興味をひくに足る文明をもつ民族が、国家建設の歴史の以前にまでさかのぼる伝承をもち、その時期に多くの変動がおこっています。遠くへだたった民族間の言語のつながり、という上の事実からすると、アジアを起点とする民族の広がりが、原初の類縁性をこれほど広範な地域にしめすことになったという事実を、たしかなものとしてうけいれるほかはない。(Hegel 1837=1996: 107-8)

こうした諸言語における類縁性の考察は、分岐する以前の祖語の存在についての思索を生み出し、その祖語の話者集団（始原の言語共同体＝祖先民族）の存在様態とその祖先民族から現存する諸民族に至るまでの分岐についての空想を惹起した。聖書において人祖であるノア（の方舟）が漂着したアララト山は、中世においてアジア（コーカサス）に実在するとされたが、聖書が世界認識の基軸ではなくなっていた18世紀以降も上述の聖書解釈は一般化していたため、人間はアジア（コーカサス地方）発祥であると考えられていた（李 2024: 101）。このためサンスクリットとヨーロッパ諸語の類縁性から、インドの古代語であるサンスクリットをこれら諸語の祖語（に近しい言語）とする発想が生まれ、その祖語を話す民族について議論されるようになった。実際、共通起源説を唱えたジョーンズ自身が、祖語の話者集団（民族）と現存する民族との対応関係について思索していた（Arvidsson 2000=2006: 19）。

1813年、光の波動説で有名な英国の物理学者トマス・ヤングは、ドイツの言語学者ヨハン・クリストフ・アーデルングの『ミトリダテスあるいは一般言語学』の書評において、ジ

ヨーンズが唱えた諸言語の共通起源説を敷衍し、インドとヨーロッパの諸語を同祖の言語であるとして「インド・ヨーロッパ語族 (indoeuropean languages)」(Young 1813: 255) に範疇化すると、それ以降、この範疇化は広く採用されることになった。ドイツでは、1823年に東洋学者のユーリウス・フォン・クラプロートが民族主義的な観点からこの語族を「インド・ゲルマン語族 (Indogermanische Sprachen)」としたことで、この呼称が広まった (Arvidsson 2000=2006: 20)。

しかしながら19世紀においては、この語族に対してインド・ヨーロッパ語族やインド・ゲルマン語族以上に使われた呼称は「アーリア語族（英：Aryan languages, 仏：langues aryennes, 独：arischen Sprachen）」だった。もともとアーリア人はペルシア人とメディア人を指していたのだが、先述したシュレーゲルがヨハン・ゴットリープ・ローデ『私たちの歴史の始まりと地球の最後の革命について』の書評 (Schlegel 1819) で、インド・ヨーロッパ語族の話者たち（諸民族）をアーリア人と一括したこと、意味を変えて広がることになった (Poliakov 1971: 19)。シュレーゲルは、インド・イラン語派に共通する語根にさかのぼるサンスクリットの語幹 “arya-”（古代インド社会の上流階級を指した）を、ドイツ語の “Ehre”（名誉）及び古ゲルマン語において戦士などの名前に冠した “ario-” に結びつけ、インド・ヨーロッパ語族を話していた人々に共通した自称であると主張した (Watkins 2015)。

この学説はやがて「ヨーロッパ文明の起源」への問い合わせと重点が移り、1855年に至るとヒンドゥー教の聖典『リグ・ヴェーダ』を翻訳したドイツ人の比較言語学者・宗教学者マックス・ミュラーが、インド・ヨーロッパ諸語の原型となる言葉を話していた民族である「アーリア人」が、インドからヨーロッパにまたがる地域を征服して自らの言語を広めた結果として、インド・ヨーロッパ諸語が成立したとする説を唱えた (Muller 1855: 28-9)。1860年代になると、こうした比較言語学に基づくアーリア人祖先説は人類学的に否定されるようになり (Bowler 1989: 71)，1872年にはミュラー自らがこの説を控えめに間違いだったと否定するのだが、アーリア人起源説はすでに独り歩きをはじめており、この彼の撤回はもはや注目を集めることはなかった (Poliakov 1971: 217)。

啓蒙期においては体系的とは言いつつ、ヨーロッパ、アフリカ、アジアという中世のキリスト教的世界認識下で大陸とされてきた地域に、新大陸であるアメリカが加わった四大陸を基準にした地政的分類でしかなかったシンプルな人種類型は、比較言語学上の語族に空想的に接続して複雑化することになり、人類を人種という集団ごとに文明の発展段階に位置付ける人種文明論へと変化して、アーリア人種の起源と移住についての妄論が膨大かつ熱心に行われるようになった (馬場 1977: 259-60; 寺田 1967: 156-9; Poliakov 1971: 198-217)。そしてそれまでヨーロッパの他者を位置づけるための認識枠組みであった人種分類は、人類史の展望のもと、アーリア人種の高貴さを受け継ぐ正統性をめぐって、古くからの諸民族史を人

人種という境界

種史に読み替える歴史叙述・歴史学の展開と絡み合いながら、ヨーロッパ人の分類を細分化させていくことになったのである。

4. 人種の不变性と連続性：生理学と民族学によるネイションの基体化

19世紀の比較言語学がヨーロッパを含む世界の諸語を系統化すると、それは空想的な言語話者（言語共同体／民族）の系統化につながり、ヨーロッパ史が国家を枠組みとした人種の発展史として記述されるようになった。こうした歴史を駆動する人種の「力」の内在性という構想に大きく影響したのが18世紀末から19世紀初頭にかけて成立した生理学（生物学）だった。この生理学は、形態的な同一性と相違性に基づいて諸生物を分類する啓蒙期の博物学が、個体を構成する器官の機能連関に着目して有機体の生命活動を考察するものへと変化するなかで誕生したものだった。そしてこの生理学の誕生に寄与したのが、比較解剖学及び古生物学の祖とされるジョルジュ・キュヴィエだった。

キュヴィエは、各生物の諸器官が生存維持のためにどのような機能的連関にあるのかに着目した。こうした生命活動という機能的統合性に対する注目は、実は「生存の条件」という生物の自然に対する目的論的アプローチ——環境における動物の生存と増殖に必要な諸条件に見合うだけの器官を神が創造したという信念（Appel 1987: 41）——によっていたのだが、各器官が機能的に連関する法則性を見出そうとするその方法論は、唯物論的科学としての生理学（生物学）に端緒を開くことになった。

キュヴィエは、19世紀における解剖学の教本となる『比較解剖学教程』（1799–1805）では動物界を4つの亜界（椎動物、環節動物、軟体動物、放射動物）に分け、その下に属と種を階層的に配置し、神経系と呼吸器系といった機能上の系に基づいて各機能が動物界で果す手段を考察した。『化石骨研究』（1812）では、この機能主義的統合性から生体を分析する観点を化石にも適用し、現存生物と古生物とを区別することなく生体の機能主義的観点から分析することで、いわゆる古生物学の誕生を準備した。動物の体系的な分類を行った『動物界』（1817）では、キュヴィエは4つの亜界にはそれぞれ独自の「原型的形態」があり、それらは互いに独立しており、種は変化しない（不变性を持つ）と主張した。「存在の連鎖」⁶⁾のようなすべての事物を包含する序列的な連続的階層を認めず（キュヴィエは古生物には現存種との連続性が認められないとして、化石生物は絶滅した生物だと考えた）、分類体系は諸機能の従属関係によって決まる諸性質の階層構造の上に組み立てられた（Appel 1987: 41）。

ここで着目すべきは、キュヴィエが『動物界』で示した人種分類である（Cuvier 1817: 94–100）。タイトルは「人類の変異（Variétés de l'espèce humaine）」となっており、変異（variétés）が使われているものの、人間の分類には人種（races）が用いられた。「人間という種は、すべての個体が無差別に混血し、繁殖力のある個体を生み出すことができるため、

一見単一に思われるが、ある種の遺伝的な形質が見られ、それが人種と呼ばれるものを構成している」と冒頭で宣言し、白人（la blanche）すなわちコーカサス人（la caucasique）、黄人（la jaune）すなわちモンゴル人（la mongolique）、ニグロ（la nègre）すなわちエチオピア人（la éthiopique）という3人種を提示した。明示的に人種の定義は行っていないが、各人種の下位区分の諸民族が文明論的段階、歴史、宗教、言語の類縁性、表現型、身体から判断される道徳性などが、顔面角の発明で知られるオランダの美術解剖学者ペトルス・カンパーやコーカサス人種という名称の一般化に寄与したドイツの人類学者・博物学者ヨハン・フリードリヒ・ブルーメンバッハの議論が援用されつつ、頭骨や顔の解剖学的審美性などで説明されていくのだが、その説明自体は啓蒙期の人種論（李2023; 2024a）を踏襲していく——白人の起源としてのコーカサスの人々の外貌（表現型）が審美的にほめそやされ、一方ニグロの劣等性が指摘されて類人猿に近いと述べられる——人種の特徴の記述それ自体はそれまでのものと変わらない。ただ従来の人種分類と決定的に異なるのは、中世的・キリスト教的な世界認識を脱却して世界を再分割するという啓蒙期の人種分類にあった地政的な基準（李2023: 9）はもはや見受けられず、人種は居住地やその環境とは独立した、人間が原初的に持つ排他的な形質の発現結果として、すなわち生理学的（生物学的）な問題としてのみ考えられたことである。実際、18世紀においては地政的な発想に付随して独立した人種とされることがあったラップ人〔蔑称だが、原著の表現を忠実に示すためにそのまま記載〕はモンゴルかコーカサスの子孫である可能性が示唆され、アメリカ人〔先住アメリカ人〕は独立した人種として判断できる特徴に乏しいとしてモンゴル人に入ると示唆された（Cuvier 1817: 99-100）。

多くの論者が指摘しているように、キュヴィエ自身は世界の成り立ちに神の計画を見る篤信家で、聖書に示されている人間の單一性を信じていた。人類を3人種に分けているのも聖書の伝統的な解釈——神はアダムの子孫ヤペテ、ハム、セムにそれぞれヨーロッパ、アジア、アフリカを与えた——に意識的であり、無意識的であり、依拠したことによるだろう。その意味で議論は時代に逆行するものであったが、「生存の条件」という目的論に基づき、人種差を環境要因ではなく生体の内在的問題として捉えた。18世紀の人種分類は大陸別の属地的な発想だったが（ヨーロッパ人は肌の白い人種である）、キュヴィエに至っては属性的な説明へと転換して（ヨーロッパ人やアラブ人は白色人種の特性を持つ）、人種の違いは地政的ものではなく、生物学的な構成物（形質）の違いとなった。そして人間の形質に先駆的に序列が持ち込まれるとき、博物学が持っていた非ヨーロッパ人を対象とする差別的な地政的イデオロギー（どの地域の人間が劣っているか）は、個々人を対象とする差別的な社会学的イデオロギー（どの人間が劣等な形質を持っているのか）へと変貌することになった。

こうしたキュヴィエの生理学およびその人種分類は以降の人類学に影響を与えることになった（キュヴィエが学術界で多大な権力を持ったことも関係している）。軍医・博物学者

人種という境界

のジュリアン・ジョセフ・ヴィレイは、1824年刊行の『人類の自然史』（初版は1801年）で、体系的な人種分類（Virey 1824: 438）を示したが、そこでは人類が顔面角および肌の色の濃淡に応じて2種（espèce）に分けられ、さらに肌の色に基づいて6つの人種（race）が下位分類されて、類型的な（とヴィレイが考える）諸民族が各人種に振り分けられた。さらにジョーンズ以来の比較言語学も反映されて、18世紀の人種分類ではヨーロッパ人を示す单一のまとまりとしてあった白色人種が下位分類された（アラブーインド系とケルトおよびコーカサス系）。と同時に、啓蒙期以降一貫して劣等視されてきた黒色人種は、もともとの形質自体が異なる別の種であるとして、次のように説明された。

自然誌において種と人種を区別するのは、気候や食物などの相反する外的要因の影響にもかかわらず、特徴的な形質が永続することであり、人種は単一の原初的な種（espèce）を変化させたものにすぎない。我々が収集したすべての事実は、あらゆる気候の下で、またさまざまな状況にもかかわらず、黒人の身体的・道徳的特徴が消えずに持続していることを示す点で一致している。したがって、自然誌において、黒色人種が地球上で知られている他の人種とは異なる人種であるばかりか、本当の種（espèce）であることを否定する理由はないのである。（Virey 1824: 32-3）

主張されている形質の永続性がキュヴィエの議論を下敷きにしていることは明らかだが、加えて「消失しない型（type indélébile）」を持つ人種としてユダヤ人が言及された（Virey 1824: 435）。世界に離散するユダヤ人は、どこでも同じ特徴を保持していることがその理由だった。種（espèce）、人種（race）、民族（peuple/nation）などの人間集団に関わる概念が混乱して使われているのだが、ユダヤ人を形質的に「人種」と見なしつつ、（黒色人種を白色人種と別の種とすることとあわせて）ユダヤ人を白色人種から除外することが提案された。

以降、白色人種の分節化はいっそう進むことになった。フランスの人類学者・科学史家クロード・ブランケールはフランス民族学の成立について論じた研究で、パリ民族学協会（Société Ethnologique de Paris）を立ち上げたアントワーヌ・デムーランやフランス民族学を準備しながら早世したウィリアム・フレデリク・エドゥアールが古代および中世の史書を精査しつつ、記述されている民族学的特徴を生理学に基づけて人種の型を論じ、ヨーロッパ人の人種的細分化を進めたことを指摘している（Blanckaert 1984）。デムーランは、古代学、生理学、解剖学、動物学などを古代民族の起源研究、語源研究、歴史批評などに応用した『北東ヨーロッパ、北・東アジア、南アフリカ諸人種の自然誌』（Desmoulins 1826）で、白色人種にスキタイ、コーカサス、セム、アトランティスという4つの下位区分（人類自体は16人種）を設け、エドゥアールはデムーランの試みを引き継ぎ、アメデ・ティエリに自分の構想を説明するという形式を取った著作『人種の生理学的特徴』（Edwards 1829）で、ティエ

リのフランス（ナシオン）の人種史を敷衍し、ヨーロッパ史を各国の諸民族が不变な生理学的形質を持つ人種集団の歴史として再分節することを試みた。ブランケールによればこのエドゥアールの試みは、人種という形質的な概念と国民性（nationalité）という文化的原理を統合した結果、「民族学」あるいは「人類の種族に関する科学」と呼ばれるようになる新しい学問分野を生み出し、欧米の人種学の原型ともいるべきテキストとなった（Blankaert 1984: 420-1）。

実際、先述したアメリカ人種学派のノットとグリンドンは、その基幹的著作『人類の型すなわち民族の古代遺跡、絵画、彫刻、頭蓋、および自然、地理、言語、聖書の歴史に基づく民族学的研究』（Nott & Gliddon 1854）で次のように述べ、ティエリとエドゥアールがヨーロッパ人に対する民族学のいわばフォーマットを作ったことを讃嘆している。

ヨーロッパの多種多様な人種は、わずかな例外を除いて、コーカサスの下に分類されてきた。そしてこれらの人種はそれぞれアジアから派生したに違いないと、何年も前から考えられてきた。さらに博物学者が身近に存在する歴史ある諸人種を黙殺する一方で、遠く離れた野蛮で無名の部族の研究に時間を費やしてきたことは奇妙である。

この定石を打ち破る最初の哲学的な試みを行った、歴史家として有名なティエリ氏と博物学者として有名なエドゥアール氏に感謝したい。彼らはヨーロッパの中心部に直接入り込み、長い間知られていた諸人種の歴史と身体的特徴を見事に検証し、それらをいくつかの原始の起源にさかのぼるよう努めた。（Nott & Gliddon 1854: 89）

エドゥアールが1839年にパリ民族学協会を立ち上げると、その後各地で民族学の研究団体が設立された。1842年にニューヨーク民族学協会、1843年にロンドン民族協会、1851年にはオランダ王立言語・農学・民族学研究所などである（Keevak 2011: 162）。こうした民族学はその後立ち上がる人類学と似ているため、今日ではその境界は曖昧に見えるが、当時の民族学には明確な目的があった。この点、当時の民族学に大きな影響を持った英国の医師・民族学者ジェームズ・カウルズ・プリチャードが当時、民族学について以下のように言及しており、当時民族学が学問としてどのように考えられていたのかがよくわかる。少々長くなるが引用したい。

人類の多様性を配分し、分類する際に採用されてきた区分は無数にある。人間の変異（varieties）を異なる人種から構成されると考える人々の間では、別々の部族（tribes）の数に関して、二人の書き手の意見が一致することはない。そして、新しい民族学者が現れるたびに、先行者が一括りにしていた諸民族（nations）は細分化され、分離されていたものがまとめられるということが起こる。私は、人類がもともと異なる系統から生まれた

人種という境界

ことを当然と考える人々には従わないので、こうした考え方について立ち入った議論をするのは無駄なことであろう。そのため、私は、歴史的な証拠によって、また最も信頼できる記録によって区別されると思われる人間の主要部族について、簡潔に説明することに努めよう。言語学 (Glottology) すなわち言語関係の正確な分析に基づく言語の歴史は、ほとんど新しい研究分野である。この分野では最近、大きな成功を収めており、毎日新しい発見がなされている。民族学 (ethnology) と呼ばれる諸民族 (nations) の歴史は、主としてその言語の関係に基づかなければならぬことを同時代の人々はますます確信するようになってきている。この調査の究極の目的は、言語の歴史をたどることではなく、言語がその類縁性を示す傾向にある人間の部族の歴史をたどることである。同時に、前節で指摘した大きな身体的差異、特に人間の頭蓋骨の形が〔キュヴィエの人種分類を踏襲して〕3つに分かれていることを念頭に置かなければならない。これはおそらく、すべての身体的な変異の中で最も永続的なものであり、少なくとも諸民族を特定の部門に分配する際には考慮に入れなければならない。私は、さまざまな証拠から、古代につながりがあったと思われる諸人種をグループ分けするように努める。(Prichard 1843: 132-3)

ここからわかるのは当時の民族学が人種の身体的特徴を形態学的に抽出して、古代からの民族誌を遡及しつつ、国家／民族 (nation) の成り立ちを諸人種の構成として系譜的に記述する歴史の科学だったということである。もちろん民族学にもアプローチに違いはある、プリチャードは比較言語学を援用した分析に重きを置いていたが、エドワールは民族学に言語 (史) 学を持ち込むことを信憑性に欠けるとして嫌っていた。ただそうした方法論の違いはあってもそこで目指されていたのは、18世紀までヨーロッパとの対比において一枚岩に捉えられていたヨーロッパを、人種の形質という遺伝的に不变である（と信じられた）集団の特徴に基づいて、ネイション単位で再分節し、系統的に位置付けるということだった。

こうした民族学が要請されたのは、18世紀から19世紀にかけて生じた社会変化があったことによる。産業化と世俗主義の進展によって、伝統的な社会的紐帯が崩れて、階層分化が進んで、社会のアトム化が急激に進展した。同時にそれは伝統的な共同体が、ネイションというきわめて抽象的な社会政治的集団に再編される過程でもあった。民族学は「人種」を通じてネイションを古来から系譜づけることで、不变的で連續的な生物学的実体として科学的かつ歴史的な存在証明を行い、ネイションの求める「過去性」⁷⁾に応えたのだった。

5. ナショナル・セントリズムと歴史：ネイションの基体としての人種

19世紀は、世俗主義の進展に伴う伝統的な社会的紐帯の弱体化、フランス革命以降の国民国家の拡大と頻発する国家間戦争、産業の発展に伴う社会の階級分化などによって、共同

性における歴史意識に大きな変化が生じた時代であった。端的に言えば、古代・中世の史書や民族（誌）^{ネイション}言説が、国民国家の歴史編成において再分節されたのである。同時にそれは人種を文明発展の本質的な駆動力と見なし、ヨーロッパの諸民族を人種として再分節しつつ、各人種を序列化する進歩史観の発展と相即していた。そこでは人間の身体的特徴、習慣慣習や行動の特殊性、言語、文明度、歴史などを集団（人種）単位で生物学（生理学）に依拠して説明することが行われた。先述したように、生物の諸組織を自律的な生命活動の観点から機能の連関において分析する生理学（生物学）が18世紀末に立ち上がり、それが歴史記述の観点に持ち込まれて、人間の歴史を神の摂理や環境のような外因ではなく、生物の内在的な原理（生理）の展開として理解・説明する発展史観が広まつたのである。

もちろん啓蒙時代には従来の「普遍史」——聖書を基盤に人類の歴史を神の計画に沿った、人類の救済という目的に向かって進む、直接的かつ発展的な過程とする世界史——は崩壊していた。聖書の記述が実証的に批判され、天文学や地質学に依拠したより客観的な年代史が採用され、大航海時代以来の様々な発見、聖書より古い時代を記述していることを否定できない中国や中東の歴史書の流入などもあって、啓蒙時代には歴史全体を人間精神の進歩の過程としてとらえる思潮が優勢となり、世俗的・文化史的な啓蒙主義的世界史が各国で登場した。イギリスでは歴史家のエドワード・ギボンが『ローマ帝国衰亡史』(Gibbon 1776-88=1995-6)を、ドイツでは1785年以降ゲッティンゲン大学の歴史学教授であったヨハン・クリストフ・ガッテーラーを開祖とする「ゲッティンゲン学派」が普遍史を脱して世界史を記述はじめ（岡崎 2016: 150）、フランスでは數学者・啓蒙思想家のニコラ・ド・コンドルセが『人間精神進歩史』(Condorcet 1795=1951)を著したように、ヨーロッパ諸国では18世紀末までに普遍史の時代から啓蒙主義的世界史の時代へと移行していた（岡崎 2016: 148-50）。

19世紀に入ると、世界史はロマン主義とナショナリズムの高まりを背景に、ヨーロッパ（多くは著者が属するネイション）を中心とする民族／国家の歴史として構想されるようになった。近代歴史学の祖とされるフランスのジュール・ミシュレも『世界史入門』(Michelet 1834=1993)で、フランスを中心としたヨーロッパの諸民族史によって世界史を代表させる歴史を示した。ヘーゲルは「世界史において問題となるのは、民族（Volk）という単位であり、国家（Nation）という全体」(Hegel 1837=199631-2)であるとした。そのヘーゲルの歴史を觀念的だと批判して実証史学の道を開いたとされるレオポルト・フォン・ランケも「人類一般の立場からみると、歴史上ただ偉大なる民族（Nation）だけに現われる人類の理念が、徐々に全人類を包むにいたるべきものであろうと、私には思われる」(Ranke 1854=1961: 42)と述べ、ラテン・ゲルマン民族がモデルとなる世界史を展開した。

19世紀前半には、こうした諸民族／国家史の背景に人種を見出す歴史家——上述のミシュレもそのひとりである——が増えしていくことになった。パリ大学の科学哲学・科学史研究者のクロード＝オリビエ・ドロンは、フランスにおいて「人種の科学」は1830年代に自然史、

人種という境界

文献学、歴史の交差する点で制度化されたと述べているが (Doron 2019: 123)、この時代には人類の発展自体が人種それ自体に内在する力によるものと考えられ、ヨーロッパ諸地域の国家的分化が進んだことに応じて、歴史的諸民族は人種に再分節され、人類史は諸人種（民族）の交差に伴うその特質の伝播と希釈化（＝退化）の行程とされた。言い換えれば、歴史に関わる諸分野を生理（生物学的資質）すなわち人種に基づいて説明する傾向が19世紀初頭のヨーロッパでは一般化した。

フランスでは、人種＝民族をいわば擬人化し、従来の身分や地位をめぐる闘争史に代わって、それらの集団が持つ生理学的“個性”（人種的特徴）によって人種＝民族間の闘争とする歴史記述が行われた。ロマン派の歴史家オーギュスタン・ティエリは『ノルマン人のイングランド征服史』(Thiéry 1825) で、ノルマン・コンクエストをイングランド、アイルランド、ノルマンなどの諸人種の闘争に伴い、その形質や文化が衝突し、融合する人種の関係史および混淆史として描いた。その兄であるアメデ・ティエリは『ガリア人の歴史』(Thierry 1828) で、フランス史を従来の王朝史的観点からではなく、ガリア〔とローマ人に呼ばれていた西ヨーロッパ地域〕に居住していた（ケルト系とキムリク系の2系統からなる）ガリア人がローマ人（ローマ帝国）によって征服され、そのローマ化されたガリア（ロマ・ガリア）は（ローマ帝国内を移動してきた）ゲルマン人に侵略されたとするフランス人内における人種の闘争史として記述した。サンシモン主義者のヴィクトル・クルテ・ド・リルは、人種を人間の活動を規定する重要な概念と捉え、「政治を遺伝的・人種的事実の領域に戻すよう努め」(Courtet 1838: VIII), 『人間科学に基づいた政治科学』を執筆した。ポリアコフのまとめを借りれば、クルテが示したのは人間存在の歴史を規定している主要な要因——「人間の存在における内在的・有機的な要因」——を探しながら、様々な人種をローマ帝国に隸属させたゲルマン人を至高の人種と見なし、人種融合が進むことでゲルマン人のもつ至高性がヨーロッパ中に広がったという歴史であった。そしてキリスト教やフランス革命が（人間にとて至高の価値を持つ）「平等精神」を掲げることができたのは、その広がりの証拠であると同時にヨーロッパ人の優越性の証しにほかならなかった。

人種の質の主要な指標はその支配力であるというのだ。主人は元来奴隸より優秀なのであった。この点から、ヨーロッパ人は、いかに混血していようとも地球の規模で優秀であることが十分に証明されるのである。同じ基準によって、クルテは黒人に対するアジア人およびアメリカ先住民の卓越性を導き出した。彼は、この世紀の一般的意見に従って、「黒人はいかなる異人種も隸属させたことがなく、彼ら自身の間で隸属しあっている」という事実によってその絶対的な劣等性が証明されるとして、黒人を最下位の等級に位置づけたのである。

クルテの独創的な考え方のひとつは、人間の歴史は人種の間の闘争——「物理的な」——

によるばかりでなく、もっと内的な仕方で、血の混合の具合によって、つまり「化学的」にも決定されるというものであった。彼はこの考えを科学的な仕方で表現した最初の人であろう。これはゴビノーを通して近代の人種主義のドグマになってゆくのである。(Polia-kov 1971=1985: 304-5)

つまり人間の歴史を規定するのは、他民族を征服し、支配しうる優越種である人種の「血」の混合度すなわち血統の濃度にほかならないというわけである。そして優越種であるヨーロッパ人であれ、劣等種である「ニグロ」であれ、その表現型や知性が不变であるのは、人種的な形質が生理学的（生物学的）に原初に組み込まれているがゆえであり、こうした形質を形作る人種の「血」の濃度が人種の文明度を規定していると考えられたのだった。

人種の階梯による文明史観と言えば、先に引いたポリアコフが言及しているように、ドイツの人種政策イデオロギーの理論的骨格を準備したとされるジョゼフ・アルテュール・ド・ゴビノー『諸人種の不平等に関する試論』(Gobineau 1853a; 1853b; 1855a; 1855b) が悪名を馳せているが（ゴビノーに関しては後述）、人種階梯的文明史観は19世紀半ばまでには歐米各地で強固な社会思潮となっており、ゴビノーがとりたてて突出していたわけではない。フランスであれば、ゴビノーに先行して哲学者のオーギュスト・コントがいた。この時代の科学主義の先端を走っていたコントは、観察による想像の優位を謳って徹底的な脱聖化をはかる実証主義を標榜し、生理学（コントの場合は人間を含む有機体全体の構造を発展的に解明する科学）によって、人類発展の諸段階を解明し、今日的な新しい社会組織の構築に役立てられると考えていた。この人類発展の諸段階は人種階梯的な文明論になっており、世界全体についての一つの体系的学問を樹立しようとした全6巻からなる『実証哲学講義』のうち歴史を論じた第5巻と第6巻(Comte 1841; 1842) や『実証哲学講義』をコンパクトにまとめた『実証精神論』(Comte 1844) では、（前述したキュヴィエの影響だと思われるが）人種はヨーロッパ、アジア、アフリカといった伝統的な大陸觀にもとづく基準で分類されず、表現型（肌の色）によって白色人種、黄色人種、黒色人種という3つの人種に弁別され、社会階級的な区別と重なりながら、文明論的な序列にあることが前提に議論された。その枠組みは、先に引用したポリアコフの解説したクルテの議論とほとんど同じものだった。

こうした始原における純粋人種の存在、混血による退化、人種固有の精神・文化などに基づいた白色人種の優越性を前提にした人種階梯的文明発展論は、19世紀前半にはフランス以外のヨーロッパにも広まっていた。英語圏ではたとえばイギリスの医師・科学者ロバート・ノックスの『人間の諸人種』(Knox 1850) や米国の外科医・人類学者ジョサイア・クラーク・ノットと考古学者ジョージ・グリドンの『人類の諸類型』(Nott & Gliddon 1854)などの人類学書、19世紀イギリスの最も偉大な教育家・歴史家とされたトマス・アーノルドの『近代史に関する入門講義』(Arnold 1845)などの教養書、政治家・小説家ベンジャ

人種という境界

ミン・ディズレーリの政治小説ヤング・イングランド三部作（『コニングスピー』1844年、『シビル』1845年、『タンクレッド』⁸⁾ 1847年）などである。

6. 征服の主体と人種：主権根拠の転換

先に見たアメデ・ティエリやクルテが歴史の駆動力として人種を導入したことは、革命以後のフランスという国体の主権を担う主体としてのナシオン（ブルジョア／第三身分）の権力の正当性を主張するためのものだったが、そこには従来の歴史意識とは決定的な違いがあった。それまでの権力の歴史言説は、王朝の正統性と古さ、ローマ・カトリックをいかに継承しているかという「威光」の提示、ミシェル・フーコーに倣えば「国家の国家についての言説の内部にあって、国家の法を発明し、その主権を基礎づけ、その絶えることなき系譜を語り、数々の英雄や武勲や王朝によって公法の正当な根拠を例証する役割を担っていた」（Foucault 1997: 125=2007: 143）。しかし19世紀に至っては、政治の正当性／正統性は、他民族を征服して作られた社会を支配する「力」の主張に転換しており、その「力」の獲得がほかならぬ民族（nation）／人種（race）に内在するものとして語られるようになった。フーコーはこうした政治の正当性が超越的権威から「力の歴史」に転換した契機を、17世紀半ばのアンリ・ド・ブーランヴィリエの議論に見出している（Foucault 1997: 125-91=2007: 143-214）。同時にその契機が人種主義の萌芽となっていることも指摘している（Foucault 1997: 117=2007: 134）。以下、ブーランヴィリエの政治（史）論を概観し、フーコーがそこに人種主義の胚胎をどのように見ているのかを確認したい⁹⁾。

フランス政治史家の川出良枝によれば、ブーランヴィリエに関する政治思想的な意義はフランス貴族と封建制の起源に関する歴史的著作にある（川出 1996: 84-117）。17世紀の国家体制を支えてきた王権の絶対性、身分秩序の伝統的ヒエラルキー、カトリシズムに基づく良政という三つの支柱的な統治の論理が決定的な分解を始めていたとき、退潮しつつある貴族の特権性（封建制）を擁護し、王権と第三身分とを徹底的に批判したのが旧家の出身でありながら生涯恵まれることのなかった貴族出身のブーランヴィリエであった。彼は、啓蒙時代以降を生きる理神論者として聖書を歴史化し、より合理的な古代史解釈を提示しながら、一方で近代を人間の堕落として批判し、君主の支配権に対しては貴族の自由を、第三身分に対しては貴族の支配権と優位性の双方をアクロバティックに正当化しようとした。

ブーランヴィリエによれば、もともとフランスはローマの支配下にあったガリアの地を現在の貴族の祖先である frank 族（ゲルマン系民族）が征服して領土化することで成立したものである。その貴族の統治においては人間本来の自由と平等が実現され、維持されていた。しかし第三身分が貴族に隸属しながらもその自由と平等によって王権の支援を受け、次第に貴族の支配から独立してその特権を篡奪した。こうしてガリアにあった自由と平等は第三身

分に侵害されていったという墮落史観をブーランヴィリエは提示した。

ここで興味深いのは、ブーランヴィリエは「存在の連鎖」に見られるような伝統的な位階秩序を否定し、人間はその理性と法において根本的に平等であると主張しており、その意味ではホップズやルソーなどの近代的自然法論者たちと同じ立場に立っていながら、伝統的な身分制を徹底的に擁護したことである。一見矛盾したその議論を支える論理は、ひとえに征服という「力」の絶対化による。すなわち本来平等である人間にヒエラルキーが生じるのは、その人間たちに力の差があることによっている。ブーランヴィリエによれば、フランク族はもっとも自由で、完全に平等で、独立していたがゆえにガリアを征服しえ、そしてその統治においては人間本来の自由と平等が実現され、維持されていたのだが、王権と第三身分のヒエラルキーを曖昧にする癒着と、それによって進んだ社会のいわば近代的な展開は、理想的な政治体制としての封建性を堕落させたというのである¹⁰⁾。

フランス史家のアンドレ・デヴィヴェールは、ガリアを征服して支配者（領主）となったフランク人（ゲルマン系民族）の戦士を祖先に持つ貴族（第二身分）だけが、その血統のゆえにガリア（フランス）に正当な主権を持つネイションにふさわしく、その血を持たない第一身分や第三身分にその資格はないとするブーランヴィリエの行論に、「血と地（Blut und Boden）」というナチス・ドイツの人種主義イデオロギーを見て取り、史実に則してそのロジックを批判している（Devyver 1973: 353-90）。なるほどこのブーランヴィリエの貴族制擁護のための立論は、後述するアルテュール・ゴビノーのアーリア人優越主義の人種的文明論に採用され、そのゴビノーの議論はナチス・ドイツの人種主義イデオロギーに援用された経緯があるから、ゴビノーの議論をナチスの人種主義の祖型と見なすのはあながち間違いではないと思える。しかしそれ以上に「人種（史）」という観点から見た重要な点は、この後フーコーの議論を参照するように、ブーランヴィリエの議論では権力を根拠づける位相が伝統的なものから大きく転換していることである。

ブーランヴィリエの「征服」という過去にナシオン（nation）という共同体創設の起源を見る立論は、権力の基盤を歴史的威信から支配の過去性に変えたという点でラディカルなものではあったが、一方で自己破壊的なものでもあった（川出 1996: 107）。過去に他民族（ガリア人）を征服した民族（フランク人）に政治的支配の正統性（主権）を根拠づけるその論理は、結局は征服者となった民族が権力の正統性を持つということになり、権力を征服という結果に基づく相対的な関係に変えてしまったからである。実際、第三身分出身の司祭で、フランス革命の指導者であったエマニュエル=ジョゼフ・シェイエスの、フランス革命を後押ししたとされるパンフレット『第三身分とは何か？』（Sieyès 1789）では、貴族こそが国民にとっては「異邦人（étranger）」であるとして批判・否定され、力を持った第三身分によるナシオン・フランセーズの歴史が新たに始まることが訴えられており、ブーランヴィリエの貴族制擁護は自らの論理で完全に葬りさられてしまった。

人種という境界

征服が全ての関係を崩したのであり、出自の高貴さは征服者の側に移ったのである、と。よし、それならば出自の高貴さを反対の側に移し直さなければならない。第三身分は、今度は自らが征服者になることで、貴族となるであろう。(Sieyes 1789: 17=2011: 24)

フーコーは統治権力の正当性を相対的な力関係に変えたこうしたブーランヴィリエの議論に——その論証の正しさや影響力とは別に——政治的正統性に関する根本的な歴史的变化を読み取っていると先述したが、注目すべきはここでの政治主体が本来的で不变的な（と考えられた）歴史的な人間集団——19世紀にこの集団は「人種 (race)」とされることに関しては後述——を基体としていることである。ただしブーランヴィリエの著述では、race はサクソン人王族 (Race Saxonne) といった使い方がある他は、フランス王国の基となったフランク王国三王朝（メロヴィング、カロリング、カペーの王家の系統）に対するもので、いわゆる人種の意味では使われていない。今日的な意味での人種に関わってブーランヴィリエの議論で注目すべきは、フランスという国家が血統／出自の違いによって峻別される複数のナシオンによって構成されており、そのうちの1つのナシオン（ブーランヴィリエにとっては貴族）が政治を統べる主権を歴史的に持つとされていることである。フーコーはここにナショナリズム、人種、階級といった概念の萌芽を認めている。

当時、ナシオンとは、領土を単位として定義されるものでも、ある定まった政治形態によって、あるいは何らかの^{インベリウム}支配に従属するシステムによって定義されるものではありませんでした。ナシオンには国境がなく、はっきりとした権力のシステムも国家もありませんでした。ナシオンは、国境と制度のうしろで自由に動き回っている。ナシオン、というより「諸」ナシオン、つまり身分、習俗習慣、特別な掟——しかし国家の定めた法律というよりはその身分にふさわしい決まり事として理解される掟なのです——を共有する人々、個々人からなる諸々の集合、社会、集団です。これが、こうした要素が、歴史において問題となっていくのです。そしてこれらの要素が、ナシオンが、発言していくことになるのです。国家の中で自由に動き回り、互いに対立している他のさまざまなナシオンに対して、貴族もまたひとつのナシオンということになります。このナシオンという概念、コンセプトから、ナシオンについてのあの有名な問題が革命期に生じることになります。もちろん、ここから十九世紀のナショナリズムの基本的諸概念が生じることになるでしょう。またここから人種の概念が生じることになるでしょう。そして、ここから階級の概念も生じることになるでしょう。(Foucault 1975: 69=2007: 134-5)

つまり、主権は他の集団を征服しうるナシオン／ネイションが排他的かつ支配的に持つという発想を可能にしたのは、ナシオン／ネイションが政体 (régime) とは独立した、出自

や起源を同じくする排反的な集団であると考えられたことによる。そしてそうした集団の排反性と内在性が政治的に本質化されるとき、ナショナリズム、人種、階級といった概念——フーコーはマルクスの階級論がフランスの階級／人種論から作り出されたことを指摘している (Foucault 1975: 117=2007: 81) ——が生まれたというわけである。実際、この後論じるように、19世紀になると人種 (race) は系統という意味から離れて、生得的な集団的性質 (形質) の差異の顕現と理解されるようになり、ラテン語の *natio* に由来し、同胞というほどの意味でゆるやかに使われてきたネイション (nation) は、フランス語のエトニ (ethnie) ——言語・文化・歴史・伝統・社会構造・地域的結束などを共有し、一体性を持つ集団——に相当する、社会政治的アイデンティティを持つ集団に対して使われるようになっていった。そしてそれは、人種による主権の正統化が、次第に国内の社会階級の選別・退化の言説へと転化していくことを可能にもした。

7. 秩序の防衛：人種混淆と文明の衰退

ブーランヴィリエの議論は、絶対王政期に衰退していく貴族を反動的に擁護するものであったが、革命後の時代に貴族（制）擁護のためにブーランヴィリエの議論を懐古的に焼き直したのが、外交官・作家・思想家であったアーサー・ド・ゴビノーによる『諸人種の不平等に関する試論』(Gobineau 1853a; 1853b; 1855a; 1855b) だった。貴族に憧れていたゴビノーは（貴族階級出身ではないにもかかわらず、貴族風に見せるために“ド”を自称した）革命によって身分性（封建制）の解体された、第三身分を中心としたネイションによる平等な社会を嫌悪した。そして革命以後の社会を批判するために援用されたのが人種論だった。ゴビノーは先述したティエリやクルテらの人種を歴史の駆動力と見なす同時代の思潮を反転させ、文明の興亡を人種の純粹性の保持と混淆による退化 (*dégénérer*) という観点から説明した。

ゴビノーは、比較言語学が仮構したアーリア語の話者を実体的なアーリア人種として措定し、古代からの民族史と当時的人類学的知見を接続させ、言語の系統を人種的血統に置き換えることで、人類史を「人種」の観点から一元的に再構成した。彼は、人類を白色人種・黄色人種・黒色人種の三つに分類し（三人種分類に関しては4章を参照）、白色人種にはコーカサス、セム、ヤペテ（アーリア人はヤペテの子孫とされた）の諸族を、黄色人種にはアルタイ、モンゴル、フィン、タタール諸族を、黒色人種にはハム族を含めた。そのなかでもアーリア人を最も優れた人種と位置づけ、その身体的特徴（碧眼、金髪、広い額、長い手足など）とともに、精神的・道徳的・創造的資質において他の人種よりも卓越していると主張した。

ゴビノーにとって文明の創造・維持・発展は、高貴なアーリア人種の人種的な力に支えられたものであり、ヨーロッパが長らく繁栄してきたのは、アーリア人種（フランスであればゲルマン系民族であるフランク人）が貴族として支配階級を形成し、その血統を保持してき

人種という境界

たからにはかならなかった。封建制は、こうした貴族の血統を守るために制度であり、文明秩序の根幹をなすものだった。ところが革命によって身分制度が廃止されて、第二身分（貴族）と第三身分（平民）の境界は曖昧となり、劣等な血統との混淆が進み、アーリア人種の美質は希釈され、ヨーロッパ文明は衰退へと向かうことが必然となった。というのも、こうした人種混淆が退化を招き、文明を衰退させてきたことは世界（史）を見れば明らかである——これがゴビノーの主張であった。

ゴビノーの議論は、きわめて牽強付会で、議論は恣意的に根拠のない主張が散りばめられており、いわゆる実証に耐えるものではなかった。すでに同時代に、パリの自然誌博物館の人類学教授であったアルマン・ド・カトルファージュからは、その議論に種々の混乱と矛盾があり、歴史的な方法に根本的な欠陥があると批判された（Quatrefages 1857）。少し後になるが、20世紀前半のドイツにおける反ユダヤ主義のイデオロギーにしてゴビノーの継承者とされた政治評論家ヒューストン・ステュアート・チェンバレンにすら、ゴビノーの議論（人種混淆による文明の必然的な衰退）は根拠のない妄想だと揶揄された（Chamberlain 1899: 267）。実際、現在では人種主義イデオロギーの嚆矢と見なされることが多いゴビノーの著作だが、そもそも『諸人種の不平等に関する試論』は刊行当時においては注目されず（福田 1989: 45）、20世紀に入るまで大して関心を持たれることはなかった（Arendt [1951] 1962=2017: 90）。ただ米国で奴隸制擁護の論陣を張っていたアメリカ人種学派¹¹⁾は、ゴビノーの議論の一面——人祖多元論と人種間とくに白色人種と黒色人種の間に存在する生得的な文明度の差——を受け入れて称揚し¹²⁾、フランスにおける人種学の立ち上げに影響を与えたことはあった¹³⁾。今日における人種主義イデオロギーの先駆者といったゴビノー観が形成されたのは、アーリア人種を優越人種とし、人種混淆は文明を退化させるとした議論が、後にドイツに受容され、ナチス・ドイツの人種イデオロギーに援用されたことによっていた（Mosse 1964=1998: 128-30; Puschne 2001: 77-81）。

とはいっても、西洋政治思想史家の長谷川一年が詳細に読解してみせているように（長谷川 2000; 2001）、ゴビノーの議論は決してナチス・ドイツの人種論イデオロギーの祖型と単純に言えるようなものではなかった。現存のヨーロッパ諸人種がアーリア人種の分化と異人種との「混血」を通じて形成された退化人種と論じられ、有色人種も白色人種にはない特質を持つとして、ヨーロッパ人を優越人種とする同時代の人種論を相対化する観点があった。ユダヤ人についても否定されているどころか、むしろ苦難を耐えて生き残ってきた民族（人種）として賞賛された。人種的な「混血」に関しても白色人種に退化をもたらしたものとして否定的に語られている一方、他人種との「混血」は文明を世界化するために必然的なものであるために歴史の駆動力であるというふうに自己撞着的に論じられていて、ナチス・ドイツにまでいたる19世紀から20世紀前半にかけての人種思想とは対立する面が多々あった。

ここで注目したいのは、19世紀前半に広がっていた人種階梯的文明論とゴビノーの議論

との異同である。人間の始祖こそ聖書に依拠してアダマイト（adamites）とされ、セム、ヤペテという聖書の登場人物が採用されてはいるが、コーカサス人種が実体的に議論に組み込まれていることからわかるように、ゴビノーは伝統的な宗教観からは脱していた。人類は複数の起源を持つ複数の「人種（races）」からなるとする人祖多元論を主張し、人祖单元論の聖書とは相反する立場をとっていた。現在の人間（人種）をその始祖からの退化した存在と見なす点にしても、アダムとイヴの楽園からの追放に伴う人間的苦悩（堕落）の始まりという聖書の物語に依拠しているようだが、意識されているのは多分に（書名からしても）ジャン・ジャック・ルソー『人間不平等起源論』（Rousseau 1755=2016）だった。ルソーは自然人という人間の始原的理念型を立て、同時代人は自由を喪失して堕落した存在だと論じた。人間は政治社会を創立して自由でありえた自然状態を脱却したことで文明化したもの、人間に支配—被支配という不平等が生まれ、堕落したというわけである。しかし徹底的に支配され隸属した人間は、何ら社会的属性を持たない自然状態に置かれるがゆえに平等になり、隸属状態を脱すべく自由を希求するとき、その支配者の善にも正義にも依拠しない「力」による支配は、被支配者の「力」によって覆されるという主張は、よく知られているように、後年、フランスの絶対王政に対する批判と革命の理論的な基盤となった。

しかし革命後を生きるゴビノーはルソーとはまったく逆に、というよりルソーに対抗して、人間はその起源において生来から人種的に不平等であり、白色人種（アーリア人種）が持っていた文明的特質も、他の人種と混淆することでその特質は希釈化されて凡庸化してしまったと同時代を悲嘆した。というのも先述したようにゴビノーは、政治勢力としてはすでに力を持たなかった特權階級である貴族に憧憬の念を抱いており、革命を通じて形成された（貴族にとっては卑賤でしかない）平等な市民からなるネイションを文明的な堕落として嫌悪していたからである。アーリア系の優越人種たるゲルマン民族の貴族階級が非アーリア系のガリア人である第三身分による革命によって没落し、平等な市民による国家となることで社会は大衆化（凡庸化）して、優越人種の支配によって維持されていた美質は失われたと考えた。つまりゴビノーの議論は、人種の観点から歴史化された、大衆憎悪に裏打ちされた旧時代の貴族をロマンティックに追慕する反ナシオンの身分論＝階級論であり、ティエリ兄弟やクルテのように進歩主義的な観点から人種の力を現在において肯定しようとする同時代の人種觀とは対極にあった。

こうしたゴビノーの人種觀で注目すべきはその階級に関わる点で、人種混淆による文明の衰退を下層階級に見てとっていることである。世界の諸民族における人種混淆とその文明の衰退について様々に議論しているゴビノーだが、実は衰退がどのように現象しているのかについてはほとんど述べていない。ただ大都市の下層階級における人種混淆については、以下のように具体的に言及した。

人種という境界

パリ、ロンドン、カディス、コンスタンティノープルでは、城壁の外に出ることなく、先住民を自称する集団を観察するだけで、人類のすべての分枝に属する特徴を見つけることができる。下層階級では、黒人の出っ張った顎から、中国人の三角形の顔とつり上がった目まで、あらゆる特徴が認められる。なぜなら、特にローマの支配以来、最も遠く離れた異質な人種が、私たちの大都市の住民の血統にその一員を供給してきたからである。(Gobineau 1853a: 285)

ゴビノーの議論の雛形であるブーランヴィリエにおいては、ゲルマン系である貴族（第二身分）とガリア系である平民（第三身分）とは、異なる出自の民族として対立的に論じられていた。しかしゴビノーは、ヨーロッパには古代から白色人種以外の非ヨーロッパの諸民族——東欧ではスラブ系とアジア系が、南欧では黒色人種や中間人種であるセム系人種——が入り込んで混淆しており、（貴族を除けば）單一人種の純粹な継承は行われておらず、庶民には非白色人種との混淆による退化（dégénérer）が生じて、「変質（altération）」と「衰弱（affaiblissement）」が現れ、文明的・倫理的な劣化が起きているとした。つまりヨーロッパの一般民衆は、人種混淆のゆえに退化した存在にほかならなかった。

興味深いのは、ゴビノーが退化（dégénérer）という言葉を使って人種混淆による文明の衰退を論じていることである。退化という言葉を生物学的に概念として人種論に持ち込んだのはビュフォンだが（李 2023: 15-7）、ビュフォンにとって退化とは、原型である白色人種（ヨーロッパ人）が諸地域に移住して風土や環境の影響を受けて世代を経ることで変容し、生物学的かつ道徳的に劣化することであったが、気候や環境が変われば原型に復元できるものであった。一方、ゴビノーにとっての退化とは、白色人種が黄色人種や白色人種という劣等な人種と混淆することによって、身体的・文明的・倫理的な劣化を引き起こすことであり、多様な人々が混住する都市の下層階級を長きにわたって不可逆的に蝕んできたものだった。実のところ、下層階級を退化した人種とみなす視座は、すでに19世紀前半のブルジョアジーに共有されていた。産業化の進展にともない都市に出現した貧困層やルンペンプロレタリアートといった新興の社会集団（「危険な階級」）は、ブルジョワジーによって、ネイションの秩序とリスクタビリティを毀損する劣等な「人種」として認識されるようになっていた。このゴビノーのペシミズムは、政治的影響力を失った旧支配層が、旧秩序を瓦解させた新たな社会秩序に対する懸念のなかで形成されたものだった。だがその懸念は、旧支配層の懷古的な感情にとどまらず、新たに台頭した支配層——ブルジョアジー——にも共有されるものであった。こうした人種の混交が文明を衰退させるという想像は、秩序を脅かす新たに顕現した他者を浮かび上がらせることになったのである。

8. 危険な階級と内なる人種

秩序を脅かす「他者」としての人種は、ヨーロッパの外部にではなく、社会の内部に見いだされるようになっていた。都市の下層階級や貧困層は、経済的な困窮やブルジョワ的道徳からの逸脱を通じて可視化され、しだいに人種的な特徴をもつ「内なる他者」として表象された。階級的不安は、人種の言説と結びつき、内部の異質性を秩序の脅威として浮かび上がらせるようになった。啓蒙期、絶対王政の確立とともに封建性をはじめとする伝統的な社会関係は弛緩して社会秩序に大きな変容が生じたが、18世紀後半から19世紀前半にかけて起きた産業革命はこの変容に拍車をかけた。英仏がその最たるものだが、工業化の進展によって農村から都市への大規模な人口移動が生じ、農民の都市工業プロレタリア化が進んで、都市でも農村でも従来の生活形態は大きく変容した。都市は人口増加したもの、その作りは中世以来の旧態依然としたままで、急増する人口に耐えうるだけの制度も社会インフラも整備されてはいなかった。そのため諸所にスラムが形成されるなどして、都市の治安と衛生の状況は悪化の一途を辿り、ブルジョワは労働貧民・細民に対して不安と脅威の眼差しを向け、犯罪、擾乱、疾病の元凶と見なした。

イギリスに関して言えば、19世紀初頭、18世紀末以降の産業革命が一層進展し、支配層・ブルジョワ層・労働者層の三大社会階級が形成されていくなか、ナポレオン戦争の遂行のために拡大した第2次エンクロージャーが多数の貧困問題を生み出した。1816年にナポレオン戦争が終結すると不況・恐慌と失業が襲い、人口の増加もあって貧困層が拡大した。従来は各教区単位で担われていた救貧対策であるエリザベス救貧法（the Elizabethan poor law）は費用の増大によって問題視され、農民の一揆なども生じて、貧困対策の見直しが焼眉の国家的課題となった。1834年、貧民層についての大規模な調査が行われ、不適格者・不正者（maligner）をできるだけ排除する新救貧法（The new poor law）が制定された。伝統的貧困は人間的な欠陥——身体的欠陥、知的欠陥、道徳的欠陥——のゆえであるとされ、自由主義的風潮の高まりや、それまで経験したことのない経済発展する産業社会にあって貧困層から社会的に上昇する者もいたために、貧困は構造的な問題として考えられることはなく、生來的なものとされた（Rodgers 1968=1986: 30）。

こうして従来のキリスト教の慈善と自発（voluntary）による困窮者支援は見直され、壮健者（able-bodies）に働くことを促す劣等処遇（less eligibility）——壮健者への扶助は監獄と言っていい環境での労役場に限定し、救済対象者の境遇は最下層の自立した労働者の境遇を上回らないという、救済の享受が否定的に捉えられるような自立支援——に転換された。ここで注目すべきは、「1830年代から1840年代にかけて、極端な場合、経済的・環境的困窮は、身体的・生物学的・遺伝的な危険になりうると広く信じられるようになっており、貧

人種という境界

困にあえぐ人々は別の人種を構成しているという見方と結びついた」(Luckin 2006: 243-2)ことである。たとえばジャーナリスト・社会改革者として高名なヘンリー・メヒューは、『モーニング・クロニクル』紙に「ロンドンの労働とロンドンの貧民」という統計資料を使った今日で言うルポルタージュを連載し¹⁴⁾、下層階級の労働と生活を初めて社会に知らしめたとして人気を博したが、「路上生活者(street-folk)」という項目で「放浪部族(wandering tribes)一般について」説明する際、次のように書き出した。

地球全体の人口を構成するとされる1億人の人間のうち、社会的、道徳的、そしておそらく身体的に考えて、概して2つの顕著な人種(races)が存在する。すなわち放浪者と定住者——つまり浮浪者と市民——であり、遊牧民(nomadic tribes)と文明化された部族(civilized tribes)である。[...]さらに、すべての人種が放浪者と定住者に分けられるだけでなく、文明化された部族や定住した部族には、概ね放浪者の群れが混在し、多少なりとも寄生しているようである。(Mayhew 1951: 1)

さらに「無教育の路上生活者(street-people)」は「大部分が、食欲、本能、情欲しか持たない未開人(savage)とほぼ同じで、原始的で残酷な状態のままである」として、ベドワイン、先住アメリカ人といった非ヨーロッパの諸民族になぞらえられた(Mayhew 1951: 213)。すなわち農村から都市に流入する人々は、ブルジョワとは異なる人種であり、未開な存在とされた。

また、19世紀後半、イギリス初の医学統計学者であるウィリアム・ファーは人種という概念を西洋人と非西洋人の間の肌の色のような身体的差異に対してだけではなく、イギリスに住む人々の部族的な起源や階級間の差異を示すためにも用い、ファーやフローレンス・ナイチンゲールといった衛生改革者は、不健康な環境が人種的に退化をもたらすことを危惧していた(Eyler 1979: 155)。

イギリスの産業革命を後追いしていたフランスでも、19世紀初頭から都市に流入する人口増加に伴う犯罪、擾乱、感染症(1830年代には数度のコレラの流行があった)などの疾病の拡大が社会問題となっていた。1830年代には、アンドレ・ミシェル・ゲリーが『道徳統計』(Guerry 1833)で、1825-30年の司法省の社会調査資料に依拠して都市化や教育との関係から犯罪の増大を考察した(富永 1985: 119-48)。1840年代に入ると、先行するイギリスの貧困問題・対策を批判しつつも、貧困は社会に対する脅威であると見なされて、貧民に対する社会調査報告が相次いで刊行された。道徳・政治科学アカデミー(Académie des Sciences Morales et Politiques)から委託され、フランス各地の織工場を回って労働者の生活を調査した報告書であるルイ＝レネ・ヴィレルメ『木綿、羊毛、絹織物工場で働く労働者の身体的・道徳的状態の概観』(Villermé 1840)、道徳・政治アカデミーの懸賞論文であ

るオノレ・アントワーヌ・フレジエ『大都市における危険な階級とその状態改善の方法について』(Frégier 1840), ウジェーヌ・ビュレ『イギリスとフランスの労働者階級の貧困について』(Buret 1840a; 1840b)などである。ただしこれらの社会調査は貧困の実態調査といいつつ、下層民のうちにあって犯罪や疾病の温床となっている「危険な階級」を炙り出すための（ブルジョワからすれば反社会的な）モラルの調査にほかならなかった¹⁵⁾。フランスの歴史家ルイ・シュバリエは今や社会史の古典となっている『労働者階級と危険な階級』(Chevalier 1958=1993)で、こうした社会調査において、労働者階級には犯罪や不衛生によって社会秩序を脅かす不道徳な「危険な階級」が存在するとブルジョワから見なされたことを詳細に論じたが、着目すべきは、こうした人々がイギリスと同様に人種的なタームで記述されたことである。

未開人、野蛮人、流浪民。労働者階級はそのようなものとして見なされたのであり、その理由については、すでに我々は明らかにしている。一般的に使われていた、そしてまたこうした文のなかに執拗に繰り返されるこれらの言葉は、この時代を通して、パリの社会的抗争の真に人種的な特徴を示すものであった。各社会集団は、人種を表すこのような言葉使いで互いを認識し、評価し、また敵対したのである。(Chevalier 1958=1993: 389)

シュバリエによれば、1810年代にはウジェーヌ・シューやヴィクトル・ユゴーらの文学作品において下層階級の人々を上述のような人種的タームで比喩することが始まっていたが、40年代の社会調査では明示的に使われたという。求職や貧困のために農村から都市に流入する人々は都市の定住民ではなかったこともあって流浪民(nomade)と見なされ、定職に就かないその日暮しの生活形態は非ヨーロッパの未開人(savage)と想像的に結びつけられ、文明的な後進者=未開人と位置づけられた。また、ときに都市ブルジョワには理解できない俚言を使い(野蛮人はもともとギリシア人が理解できない言葉を話す他民族に使っていった呼称であった)、ブルジョワのリスペクタビリティ(規範的市民性)を無視するだけでなく、その社会的規範を逸脱し、ときに暴力や犯罪に及んで(ブルジョア)社会と敵対したために野蛮人と見なされた。注目すべきは、啓蒙期までは歴史的・地理的な規定を受けた人間集団を弁別するために使われた人種(race)というカテゴリー概念が、そうした規定を離れて、「危険な階級」を特徴づけるための用語に転移したことである。つまりこのとき「人種」は一定の特徴を持つ人間集団の属性を表す概念になった。その属性とは犯罪、疾病、不道徳、生活規律や衛生観念の欠如、性的放縱といったブルジョワの価値観やリスペクタビリティを侵犯する社会性を意味した。こうして生物学的な変異を意味するものであった「退化」は、ブルジョワにとってありうべきネイションを毀損する負の社会的表徴へと転移した。そしてこのとき「人種」は、ブルジョワにとってネイションの基体となる「われわれ(self)」を指

人種という境界

すタームであると同時に、ネイションを脅かす「他者（other）」のタームでもあるという両義性を持つに至ったのだった。

9. 終わりにかえて：ネイションフッドにおける人種の政治

以上見てきたように、人種という概念は生物学的な語彙としてではなく、国家の形成・統治・排除を支える制度的・政治的構造の中核として編成されてきた。その歴史的構造が現在にまでいかに残存・変容しているかをこれまでの議論を踏まえて展望し、まとめたい。

19世紀ヨーロッパにおける「人種」概念の形成と変容は、比較言語学・生理学・歴史学・民族学といった近代的学知の展開と、ネイションフッド（nationhood）の構築過程との交錯なかで進んだ。ヨーロッパの諸民族を語族という視点から系譜化し、民族を話者集団、さらに入種に結びつけ、ネイションの想像的起源を構築する知的基盤となった。他方で、生理学的思考は、身体的特徴に文明度や道徳性を重ね、遺伝的に定着した差異として人種を把握し、歴史学や民族学においては、こうした人種的特性を時代を超えて伝わる実体とすることで、ネイションに歴史的・科学的（生物学的）な正統性を与えることが志向された。

このようにして人種は、単なる分類上の概念ではなく、あるネイションに属する資格や適格性を査定する制度的・政治的カテゴリーへと変貌した。文化的・身体的同質性を志向するネイションの構想のもとで、ブルジョワの規範的市民性すなわちリスペクタビリティが支配的な規範として浮上し、それに適合しない存在は、道徳的・文化的に劣ったものと見なされ、しばしば人種化されて排除された。とりわけ産業化と都市化が進行するなかで出現した貧民やルンパンプロレタリアートのような「危険な階級」は、その経済的困窮以上に、「不潔」「怠惰」「野蛮」といった属性によって文化的・生理性に他者化され、ネイションの内部における排除の対象となった。彼ら／彼女らの身体は、「ネイションらしさ」に適合しないものとして、人種的な表象のうちに組み込まれた。

こうした査定の論理は、ネイションという理念の実体化と不即不離の関係にあった。フランスの社会学者ドミニク・シュナペールが指摘するように、ネイションとは「理念的な語の意味で、政治組織の統制的理念または原理」（Schnapper 1994: 100=2015: 123）であり、それは人民を統合し市民化する枠組みとして構想された。しかしこの理念は無限定な開放性ではなく、「誰が国民でありうるか」を査定する秩序の前提でもあった。つまり、理念の実現は常に排除の力を内包していたのである。その査定は、国家制度によって強化され、制度化された。国民教育、言語政策、婚姻法などの制度装置は、ネイションとしてのリスペクタビリティを再生産すると同時に、それに適合しない者を周縁化・排除する役割を担った。こうした制度的査定の根底には、文化的・身体的同質性を基準とする人種的コードが作動していた。

そして、こうした人種的査定の構造は、やがてより精緻な社会的・制度的技術のかたちを

とって内面化されていった。ネイションフッドは、ブルジョワのリスペクタビリティと重なりながら、ネイションにふさわしい身体と行動を査定する装置として、19世紀後半には犯罪学や優生学といった実践的な知において展開された¹⁶⁾。文化的・道徳的に劣ったとされる階級は、次第に「逸脱傾向をもつ身体」として取り扱われるようになり、その存在は科学的知において「可視化」され、分類され、隔離される対象とされた。犯罪を引き起こす身体的特徴や、世代を超えて再生産されるとされた「不良性」は、人種的な査定の枠組みを社会統治の論理へと移し替えるものであった。優生学では、特定の性質を持った系統を「劣等」とし、社会から排除あるいは制限すべきとする思想が強化されていった。ここでも人種的コードは、明示的であるか否かを問わず「国民の質」を維持・向上させるための選別の根拠として働いた。すなわち、ネイションの理念的装いのもとで、人種的査定のメカニズムは医学的・科学的装置として再構成され、その制度的・知的効果をより広範に拡張させていったのである。

こうした人種意識と査定の構造は、今日においてもなお制度に埋め込まれている。人種が科学的にはすでに破綻した分類であるとしても、われわれが「市民」「国民」として享受している権利の背後には、過去において制度的に排除され、可視化された身体、文化、歴史、階級の痕跡が依然と存在する。人種的査定は、制度のなかに形を変えて残存しており、その影響は現在の社会においても潜在的に作用し続けている。したがって、人種の歴史を語ることは、単なる概念や知識の系譜を整理する営みにとどまらない。それは、制度として継承されてきた排除のメカニズムを掘り起こし、ネイションと人種、査定と排除、普遍主義と本質主義の連関を批判的に可視化する作業なのである。そしてその作業は、現代においてもなお制度の深層に潜在する人種主義的思考の構造を見極め、それに対して不斷の批判的意識を保持するために不可欠なのである。

注

- 1) 長らく母語を基準として人間集団をカテゴリー化することが行われてきた。例えば今日でも民族（ethnic group）の基準に言語（母語）が用いられることが多くある。しかし文献の書字言語（written language）を一定の地理的範囲に限定される母語話者の話し言葉（oral language）と無媒介的に同一視し、社会集団を形成している言語共同体（speech community）の存在を想定することは、実のところ空想にすぎない。逆に言えば、その空想が社会的現実として機能するのは、そこにポリティクスが介在するからである。本稿は、そのポリティクスを考察するものである。なお、言語共同体を想定することの問題性については、粕谷（2007）を参照。
- 2) コロナ感染対策として開発されたmRNAワクチンの有効性が米国で検証される際、ここで指摘した錯誤した人種・民族・母語のカテゴリーの人口集団において効果が研究された。当該論文は、科学ジャーナルの査読を受けていないため、取り扱いには注意が必要だという前提で、マサチューセッツ工科大学で公開された。現在でも様々な医学関係のサイトで掲載されているが、ここではアメリカ国立医学図書館にアップされたものを挙げる（Liu 2020）。なおこの論

人種という境界

文で検査対象となっている人口集団 (populations) は、白人 (white), 黒人 (Black), アジア系 (Asian) であり、自己申告されているその祖先の内訳はアジア人は中国南部、白人はドイツ人が 1.8%, ヨーロッパ系アメリカ人が 98.2%, 黒人はアフリカ系アメリカ人が 29.6%, 南アフリカ人が 36.6%, ウガンダ人が 27%, 西アフリカ人が 6.8% となっており、基本的には出身地で人種・民族が決められているようだが、表現型（肌の色）が出身地によってさらに区分されている点は、本稿の議論に関わって注目すべき点である。

- 3) アカデミー・フランセーズ辞典はオンラインで公開されており (<https://www.dictionnaire-academie.fr/>)、第 1 版から第 9 版まで、調べたい語句をいわゆる串刺し検索できるようになっている。
- 4) 人間の分類に最初に race が用いられたのは、『ムガル帝国誌』の著者として知られるフランスの哲学者・旅行家フランソワ・ベルニエの「種 (espèce) あるいは人種 (race) による地球の新たな分割」(Bernier 1684) だとされる。確かにベルニエは先天的・遺伝的なものと考えられる外見の特徴を重視して世界の人々を 4 種ほどに分けているのだが、しかし実際の分類基準には地理的・形質的・文化的な判断がないまぜになっていて、客観的な記述・整理になっておらず、博物学における体系的分類とは言えない。
- 5) 本論の執筆中に、フランスの科学史家クロード・オリヴィエール・ドロンが、ビュフォンが人種分類に race を導入した経緯を分析しているのを知った (Doron 2017)。この後論じるように、ビュフォンが自らの人種分類にあたって race という語を導入したことには、race が高貴な血統のような系譜的に使われつつ、育種において世代的に体軀が変化する家畜の種類に使われたことがあるという点は、ドロンの議論と重なるものであることを確認し、本稿においても参照した。ただしドロンの目的がビュフォンの議論の分析であるのに対し、本稿は 16-19 世紀における race という語彙の変遷について論じるものであって、前提とアプローチは異なっている。
- 6) 「存在の連鎖」とは、米国の思想史家アーサー・O・ラブジョイが広大なヨーロッパ思想の分析を通じて剔抉した信条・觀念体系で、すべての存在物は神によって個別に創造されており（「個別創造説」）、最も高等なもの（天使）から最も下等で原始的なもの（鉱物）にいたるまで、あらゆる事物は「連続の原理」によって徐々に最小の差異をつくりだしながら単線的かつ連続的な階層秩序を形成し、低次のものは高次のものために存在するという宇宙観（コスマロジー）のことである。事物は「欠けている環（ミッシング・リング）」のひとつもない「存在の大いなる連鎖」を「充满の原理」にもとづいて埋めつくしているとされる。プラトンにまで遡り、アリストテレスが明確に觀念化したとされるこの宇宙観は、中世を通じて 18 世紀後半までヨーロッパのエピステモロジーに強い影響力を持ち、とりわけ 18 世紀の啓蒙思想においては広く受け入れられていた (Lovejoy [1939] 1960=2001: 183-207)。
- 7) 過去性 (pastness) とは、イマニュエル・ウォーラースteinが用いた概念で、現在の社会構造や秩序を正当化したり、あるいは変革を主張したりするために、「過去」を現在の政治的・社会的文脈において操作的に意味付けするあり方のことである (Balibar, Etienne et Wallerstein 1988=1995: 118)。
- 8) よく知られているように *Tancred* には当代のイギリスに代表される諸国の文明の発展原因を、"All is race; there is no other truth," (Disraeli 1847: 169) とするセリフがある。
- 9) フーコーにおける人種主義の分析では、植民地主義や帝国（主義）の問題が欠落していることはつとに指摘されてきた。本稿では紙幅の都合上、この点を論じることができなかつた。代表

的な批判としてよく知られているアン・ローラ・ストーラーの議論をここではあげておく (Stoler 2010: 140–61)。また啓蒙期における人種と植民地主義の関係に関しては拙稿 (李 2023: 2024) を参照。

- 10) こうしたフランス人アイデンティの形成（史）は、必ずしもブランヴィリエに限られるわけではなく、中世以来フランスでは広く持たれていることを米国の中世史家パトリック・ギアリーが論じている (Gearry 2002: 19–20)。
- 11) 19世紀前半、後にアメリカ人種学派と呼ばれる米国の人類学者たちは、人種多元論と人種間の生得的な文明的能力差を主張し、奴隸制擁護の論陣を張った。アメリカ人種学派に関しては清水忠重 (1981a; 1981b) を参照。
- 12) ゴビノーの『諸人種の不平等に関する試論』が、英訳にあたって、アメリカ人種学派のジョサイア・C・ノットとヘンリー・ホッツェによって換骨奪胎され、奴隸制擁護の議論に合うように都合よく抄訳されたことについては、ミッセル・M・ライト (Wright 1999) を参照。
- 13) 人類学の祖とされるフランスのポール・ブルカは、フランス人類学会の創設の際の発表（後に論文として学会誌に掲載）で、アメリカ人種学派の人種混淆による人種の退化やゴビノーの人種混淆による（ローマ）文明の衰退と没落などについて述べ、複数の人種から構成されるフランス（人）の人種的問題について論じた (Broca 1971)。なお口頭発表自体は1959年に行われた。
- 14) 「ロンドンの労働とロンドンの貧民 (*London Labour and the London Poor*)」は、1984年9月から1年間『モーニング・クロニクル』紙に連載され、メイヒューが同紙の編集から離れた後は、メイヒューによって週刊で『ロンドンの労働とロンドンの貧民』として刊行された。1951年に3巻本にまとめられて刊行され、1861–62年には拡大版が4巻本として刊行された。
- 15) これらの社会調査によって提示される貧困への処方箋は、立場やアプローチは異なっていたものの、貧困者の規律改善すなわちモラルに焦点が当てられていた点では共通していた。こうした社会調査が貧困者のモラルに焦点を当てていた点において、ヴィラルメについては清水克洋 (1981)、ビュレについては稻井 (2007)、フレジエについては田中 (2004) を参照。
- 16) 19世紀後半に、人種論が犯罪学や優生学を生み出していく経緯について、拙稿で素描を試みたことがある（李 2024b）。

文献

- Académie française, *Dictionnaire de l'Académie française*, (Retrieved July 29, 2025, <https://www.dictionnaire-academie.fr/>).
- Appel, Toby A., 1987, *The Cuvier-Geoffrey Debate: French Biology in the Decades before Darwin*, New York, Oxford: Oxford University Press. (西村顕治訳, 1989, 『アカデミー論争——革命前後のパリを搖がせたナチュラリストたち』時空出版。)
- Arendt, Hanna, [1951] 1962, *Elemente und ursprünge totaler Herrschaft*, Frankfurt am Main: Europäische Verlagsanstalt. (大島道義・大島かおり訳, 2017, 『全体主義の起源2 全体主義』みすず書房。)
- Arnold, Thomas, 1845, *Introductory Lectures on Modern History*, New York, D. Appleton & co.; Philadelphia, G. S., (Retrieved July 29, 2025, <https://archive.org/details/introductorylect02arno>).
- Arvidsson, Stefan, 2000, *Ariska idoler: Den indoeuropeiska mytologin som ideologi och vetenskap*,

人種という境界

- Stockholm: Brutus Östlings Bokförlag Symposion. (Sonia Wichmann trans., 2006, *Aryan Idols: Indo-European Mythology as Ideology and Science*, Chicago, London: The University of Chicago Press.)
- 馬場優子, 1977, 「人種主義と人種的偏見」人類学講座編纂委員会編『人類学講座 7 人種』雄山閣, 239-78。
- Balibar, Etienne et Immanuel Wallerstein, 1988, *Race, nation, classe: les identités ambiguës*, Paris: La Découverte. (若森章孝訳, 1995, 『人種 国民 階級——揺らぐアイデンティティ』大村出版。)
- Bernier, François, 1684, "Nouvelle Division de la Terre par les différentes Espèces ou races d'homme qui l'habitent, envoyé par un fameux Voyageur à M. l'abbé de la *** à peu près en termes.", *Le Journal des Savants*, Du Lundi 24 Avril, 148-53, (Retrieved July 29, 2025, <https://books.google.co.jp/books?id=QykmjtRTBB8C>).
- Blanckert, Claud, 1984, "On the origins on French ethnology," George W. Stocking Jr. ed., 1984, *Bones, bodies, behavior essays in behavioral anthropology*, Madison: University of Wisconsin Press.
- Boulainvilliers, Henri de, 1732, *Essais sur la noblesse de France*, Amsterdam: n.s., (Retrieved July 29, 2025, <https://htext.stanford.edu/dd-ill/noblesse-france.pdf>).
- Bowler, Peter J., 1989, *The Invention of Progress: The Victorians and the Past*, Oxford: Basil Blackwell Ltd. (岡崎修訳, 1995, 『進歩の発明——ヴィクトリア時代の歴史意識』法政大学出版会。)
- Brace, C. Loring・瀬口典子, 2005, 瀬口典子訳「「人種」は生物学的に有効な概念ではない」竹沢泰子編『人種概念の普遍性を問う——西洋的パラダイムを超えて』人文書院, 437-67。
- Broca, Paul, 1871, "Recherches sur l'ethnologie de la France," *Mémoires d'anthropologie, tome I*, Paris: C. Reinwald, 385-438, (Retrieved July 29, 2025, <https://books.google.co.jp/books?id=m3cRAAAAIAAJ>).
- Buret, Eugène, 1840a, *De la misère des classes laborieuses en Angleterre et en France tome 1*, Paris: Chez Paoulin, Libraire, (Retrieved July 29, 2025, <https://books.google.co.jp/books?id=0INLAAAAAcAAJ>).
- 1840b, *De la misère des classes laborieuses en Angleterre et en France tome 2*, Paris: Chez Paoulin, Libraire, (Retrieved July 29, 2025, <https://books.google.lu/books?id=5OdCAAIAAAJ>).
- Chamberlain, Houston Stewart, 1899, *Die grundlagen des neunzehnten jahrhunde I. Hälfte*, München: F. Bruckmann A. G., (Retrieved July 29, 2025, <https://books.google.co.jp/books?id=5dkgAAAAIAAJ>).
- , 1900, *Die grundlagen des neunzehnten jahrhunde II. Hälfte*, München: F. Bruckmann A.G., (Retrieved July 29, 2025, <https://books.google.co.jp/books?id=idnnYvAAAAAYAAJ>).
- Chevalier, Louis, [1958] 1978, *Classes laborieuses et classes dangereuses Paris, pendant la première moitié du XIX siècle*, Paris: Librairie général française. (喜安朗・相良匡俊・木下賢一訳, 1993, 『労働階級と危険な階級』みすず書房。)
- Comte, Auguste, 1841, *Cours de philosophie positive: La complément de la philosophie sociale, et les conclusions générales tom 5*, Paris: Bachelier, (Retrieved July 29, 2025, <https://www.goog>

- le.co.jp/books?id=5ukxJG0So0cC).
- , 1842, *Cours de philosophie positive: La complément de la philosophie sociale, et les conclusions générales tom 6 et dernier*, Paris: Bachelier, (Retrieved July 29, 2025, <https://books.google.co.jp/books?id=5fBLG5LTBACCC>).
- , 1844, *Discours sur l'esprit positif*, Paris: Carilian-Goeury et V. Dalmont, (Retrieved July 29, 2025, <https://books.google.com/books?id=48kYAAAAIAAJ>).
- Condorcet, Nicolas de Caritat, Marquis de, 1795, *Esquisse d'un tableau historique des progrès de l'esprit humain*. (渡辺誠訳, 1951, 『人間精神史 第1部 第2部』岩波書店。)
- Courtet, de L'Isle, Victor, 1838, *La science politique fondée sur la science de l'homme, ou étude des races humaines sous le rapport philosophique, historique et social*. Paris: Arthus Bertrand, (Retrieved July 29, 2025, <https://books.google.co.jp/books?id=8pj82ZkwORIC>).
- Cuvier, Georges, 1817, *Le règne animal distribué d'après son organisation pour servir de base à l'histoire naturelle des animaux et d'introduction à l'anatomie comparée, tome 1*, Paris: De Terville, (Retrieved July 29, 2025 <https://books.google.co.jp/books?id=EontzWNF-p8C>).
- Desmoulin, Antonie, 1826, *Histoire naturelle des races humaines du Nord Est de l'Europe*, Paris: Méquignon-Marvis. (Retrieved, <https://books.google.co.jp/books?id=v20Tavsb6xMC>).
- Devyver, André, 1973, *Le sang épuré: les préjugés de race chez les gentilshommes français de l'Ancien Régime, 1560-1720*, Bruxelles: Éditions de l'Université de Bruxelles.
- Disrael, Benjamin, 1845, *Sybil or the Two Nation*, vol. 1-4, London: Henry Colburn,
- , 1847, *Tancred: New Generation* vol. 1, London: Henry Colburn, (Retrieved July 29, 2025, <https://books.google.li/books?id=TeoDAAAQAAJ>).
- Doron, Claude-Olivier, 2017, "Race and Genealogy. Buffon and the Formation of the Concept of "Race," *Journal of Philosophical Studies*, Associazione Culturale Humana. Mente, (22): 75-109.
- , 2019, 福崎裕子訳「人種、自由、平等、博愛——フランスにおける科学と政治の間での「人種」概念の来歴（1815-1840）」『人文学報』第 114 号, 京都大学人文科学研究所, 123-57。 (Retrieved July 29, 2025, <https://doi.org/10.14989/252456>).
- Edwards, William Frédéric, 1829, *Des caractères physiologiques des races humaines: considérés dans leurs rapports avec l'histoire; lettre à Amédée Thierry*, Paris: che Compère Jeune, librairie, (Retrieved July 29, 2025, <https://books.google.co.jp/books?id=NYHDQNpN200C>).
- Estienne, Robert, 1538, *Dictionarium Latinogalicum*, Paris: ex officina Roberti Stephani, (Retrieved July 29, 2025, <https://books.google.com/books?id=2eJxgXJd7-0C>).
- , 1570, *Dictionarium Latinogalicum*, Paris: Apud Iacobum Dupuys, (Retrieved July 29, 2025, <https://books.google.com/books?id=DkY-AAAQAAJ>).
- Eyler, John M., 1979, *Victorian Social Medicine: The Ideas and Methods of William Farr*, Baltimore: The Johns Hopkins University Press.
- Foucault, Michel, 1997, "Il faut défendre la société," *Cours au Collège de France 1975-1976*, Paris: Gallimard. (石田英敬・小野正嗣訳, 2007, 『ミシェル・フーコー講義集成〈6〉社会は防衛しなければならない（コレージュ・ド・フランス講義 1975-76）』筑摩書房。)
- Frégier, Honoré Antoine, 1840a, *Des classes dangereuses de la population dans les grandes villes et des moyens de les rendre meilleures, tome 1*, Chez J.-B. Bailliére, (Retrieved July 29, 2025,

- https://books.google.com/books?id=5vhQAQAAQAAJ).
- , 1840b, *Des classes dangereuses de la population dans les grandes villes et des moyens de les rendre meilleures, tome 2*, Chez J.-B. Bailliére, (Retrieved July 29, 2025, https://books.google.com/books?id=YKMqAAAAQAAJ).
- 福田和也, 1989, 『奇妙な廃墟——フランスにおける反近代主義の系譜とコラボラトゥール』 国書刊行会。
- Geary, Patrick, 2002, *The myth of nations the Medieval origins of Europe*, Princeton: Princeton University Press.
- Gibbon, Edward, 1776–88, *The History of the Decline and Fall of the Roman Empire*, Vol. 1–6. (中野好之訳, 1995–6, 『ローマ帝国衰亡史 1~10』 筑摩書店。)
- Gobineau, Joseph Arthur Comte de, 1853a, *Essai sur l'inégalité des races humaines tome 1*, Paris: Firmin Didot Frères. (Retrieved July 29, 2025, https://books.google.com/books?id=DFVdAAQAcAAJ).
- , 1853b, *Essai sur l'inégalité des races humaines tome 2*, Paris: Firmin Didot Frères. (Retrieved July 29, 2025, https://books.google.com/books?id=f00BAAAQAAJ).
- , 1855a, *Essai sur l'inégalité des races humaines tome 3*, Paris: Firmin Didot Frères. (Retrieved July 29, 2025, https://books.google.com/books?id=Qk-jzgOI3KQC).
- , 1855b, *Essai sur l'inégalité des races humaines tome 4*, Paris: Firmin Didot Frères. (Retrieved July 29, 2025, https://books.google.com/books?id=-V2lroDGV94C).
- Guerry, André-Michel, 1833, *Essai sur la statistique morale de la France*, Paris: Crochard, libraire-re. (Retrieved July 29, 2025, https://books.google.com/books?id=-bRCAAAQAcAAJ).
- 長谷川一年, 2000, 「アルチュール・ド・ゴビノーの人種哲学（一）——『人種不平等論』を中心に」『同志社法學』52(4): 109–68。
- , 2001, 「アルチュール・ド・ゴビノーの人種哲学（二）——『人種不平等論』を中心に」『同志社法學』52(5): 136–69.。
- Hegel, Georg Wilhelm Friedrich, 1837, "Geographische Grundlage der Weltgeschichte," *Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte*, Berlin: Duncker und Humblo, 75–100. (Retrieved July 29, 2025, https://books.google.co.jp/books?id=14NZAAAQAcAAJ). (長谷川宏訳, 1996, 「世界史の地理的基盤」「歴史哲学講義」岩波文庫, 138–74).
- 稻井誠, 2007, 「E. ビュレの『貧困論』——『貧困』と『政治経済学』批判」, 大阪市立大学経済学研究科重点研究「経済格差と経済学——異端・都市下層・アジアの視点から」(2024年3月3日取得, https://www.econ.osaka-cu.ac.jp/CREI/discussion/2006/CREI_DP006.pdf)。
- 伊藤千尋, 2021, 「高校地理教科書における「人種」に関する記述の問題点——差別・偏見を生まない地理教育に向けて」, E-journal GEO 16(2), 327–344, (2024年3月3日取得, https://www.jstage.jst.go.jp/article/ejgeo/16/2/16_327/_article/-char/ja)。
- Jaucourt, Louis, chevalier de, 1765, "Race," *Encyclopédie, ou dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers*, edited by Denis Diderot and Jean le Rond d'Alembert. Vol. XIII. Neufchastel: Samuel Faulche & Compagnie. (Retrieved July 29, 2025, https://artflsrv04.uchicago.edu/philologic4.7/encyclopedie0922/navigate/13/3157).
- Jones, William, [I786] I788, "The Third Anniversary Discourse (On the Hindus)," *Asiatic Re-*

- searches (1): 415–31, (Retrieved July 29, 2025, <https://books.google.com/books?id=n3RUAAACAAJ>).
- 糟谷啓介, 2007, 「言語共同体概念再考」『言語社会』(1), 一橋大学, 104–25。
- 川出良枝, 1966, 『貴族の徳, 商業の精神: モンテスキューと專制批判の系譜』東京大学出版会, 84–117。
- 風間喜代三, 1978, 『言語学の誕生』岩波書店。
- Keevak, Michael, 2001, *Becoming Yellow: A Short History of Racial Thinking*, Princeton: Princeton University Press.
- Knox, Robert, 1850, *The Races of Men: A Fragment*, London: H. Renshaw, (Retrieved July 29, 2025, https://archive.org/details/McGillLibrary-osl_races-men-fragment_K74r1850-20618).
- 工藤正樹, 1979, 『日本人種論』吉川弘文館。
- 李孝徳, 2023, 「啓蒙期ヨーロッパにおける他者創出（アザリング）の政治（上）——世界の再分割と人種論の顕現」『人文自然科学論集』東京経済大学人文自然科学研究会, 153: 3–36。
- , 2024a, 「啓蒙期ヨーロッパにおける他者創出（アザリング）の政治（下）——世界の再分割と人種論の顕現」『人文自然科学論集』東京経済大学人文自然科学研究会, 154: 95–120。
- , 2024b, 「人種の構築：存在の様態と歴史——啓蒙期から第一次世界大戦まで」『現代思想』52 (14): 21–32。
- Line, Carl (Linnaeus, Carolus), 1735, *Systema naturae, sive regna tria naturae systematicae propposita per classes, ordines, genera, et species*, Lugduni Batavorum: Apud Theodore Haak: Ex Typographia Joannis Wilhelmi de Groot, (Retrieved July 29, 2025, <https://books.google.com/books?id=RDYj9g-DPRwC>).
- Liu, Ge, Brandon Carter and David K. Gifford, 2020, "Predicted Cellular Immunity Population Coverage Gaps for SARS-CoV-2 Subunit Vaccines and Their Augmentation by Compact Peptide Sets," PubMed Central: Bethesda, The United States National Library of Medicine (Retrieved July 29, 2025, <https://www.ncbi.nlm.nih.gov/pmc/articles/PMC7691134/>)
- Luckin, Bill, 2006, "Revisiting the Idea of Degeneration in Urban Britain, 1830–1900," *Urban History*, 33 (2): 234–52.
- Mayhew, Henry, 1951, *London Labour and the London Poor vol. 1*, London: George Woodfall and Son, (Retrieved July 29, 2025 March 19, 2024, <https://books.google.com/books?id=UmJNAAACAAJ>).
- Michelet, Jules, 1834, *Introduction à l'histoire universelle*, Paris: Librairie Classique de L. Hachette. (大野一道訳, 1993, 『世界史入門：ヴィーコから「アナール」へ』藤原書店。)
- 三谷研爾, 1994, 「言語の科学——比較文法の成立——」大林信治・森田敏照編著『科学思想の系譜学』ミネルヴァ書房。
- Mosse, George L., 1964, *The Crisis of German Ideology: Intellectual Origins of the Third Reich*, New York: Shocken Books. (植村和秀, 大川清丈, 城達也, 野村耕一訳, 1998, 『フェルキッシュ革命——ドイツ民族主義から反ユダヤ主義へ』柏書房。)
- Müller, Friedrich Max, 1855, *The languages of the seat of war in the East. With a survey of the three families of language, Semitic, Arian and Turanian*, London: Williams and Norgate, (Retrieved July 29, 2025, <https://books.google.com/books?id=65yRz5YbAhkC>).

- Nicot, Jean, 1573, *Dictionnaire françois-latin, augmenté outre les précédentes impressions d'infinies diction françoises, principalement des mots de marine, vénérie et faulconnerie, recueilli des observations de plusieurs hommes doctes, entre autres de M. Nicot, ... et réduit à la forme et perfection des dictionnaires grecs et latins*, Paris: Chez Jaques Du Puys, (Retrieved July 29, 2025, <https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k8725274d>).
- , 1584, *Dictionnaire françois-latin, augmenté outre les précédentes impressions d'infinies diction françoises, principalement des mots de marine, vénérie et faulconnerie, recueilli des observations de plusieurs hommes doctes, entre autres de M. Nicot, ... et réduit à la forme et perfection des dictionnaires grecs et latins*, Paris: Chez Jaques Du Puys, (Retrieved July 29, 2025, <https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k6153020h>).
- , 1593, *Dictionnaire françois-latin, augmenté outre les précédentes impressions d'infinies diction françoises, principalement des mots de marine, vénérie et faulconnerie, recueilli des observations de plusieurs hommes doctes, entre autres de M. Nicot, ... et réduit à la forme et perfection des dictionnaires grecs et latins*, Genève: Imprimerie de Jacob Stoer. (Retrieved July 29, 2025, https://www.e-rara.ch/gep_g/content/zoom/1131784).
- Nott, Josiah C. & George Gliddon, 1854, *Types of mankind, or, Ethnological researches: based upon the ancient monuments, paintings, sculptures, and crania of races, and upon their natural, geographical, philological, and biblical history*, Philadelphia: J.B. Lippincott, Grambo & Co. (Retrieved July 29, 2025, <https://books.google.com/books?id=wocOAQAAMA AJ>).
- 岡崎勝世, 2003, 『世界史とヨーロッパ』 講談社現代新書。
- , 2016, 「第6章キリスト教的世界像」, 秋田茂他編 『「世界史」の世界史』 ミネルヴァ書房, 132-53。
- Poliakov, Léon, 1971, *Le mythe aryen: essai sur les sources du racisme et des nationalismes*, Paris: Calmann-Lévy. (アーリア主義研究会訳, 1985, 『アーリア神話』 法政大学出版会。)
- Prichard, James Cowles, 1843, *The natural history of man*, London: H. Bailliere, (Retrieved July 29, 2025 <https://books.google.com/books?id=oNctAAAAYAAJ>).
- Puschne, Uwe, 2001, *Die völkische Bewegung im wilhelminischen Kaiserreich: Sprache - Rasse - Religion*, Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft.
- Quatrefages de Bréau, Jean Louis Armand, 1857, "Du Croisement des races humaines," *Revue des Deux Mondes*, 2e période, tome 8, 159-88, (Retrieved July 29, 2025, <https://books.google.co.jp/books?id=pIcNAAAAQAAJ>).
- Ranke, Leopold von, 1854, *Über die Epochen der neueren Geschichte*, Leipzig: Duncker & Humblot. (村岡哲訳, 1988, 『世界史の流れ』 筑摩書房。)
- Rodgers, Brian, 1969, *The battle against poverty*, London, New York: Routledge, 1968. (美馬孝人訳, 1986, 『貧困との戦い』 桦出版社。)
- Rousseau, Jean-Jacques, 1755, *Discours sur l'origine et les fondements de l'inégalité parmi les hommes* (坂倉裕治訳, 2016, 『人間不平等起源論 付「戦争法原理」』 講談社。)
- Schlegel, Friedrich von, 1808, *Ueber die sprache und weisheit der Indie*, Heidelberg: Mohr und Zimmer, (Retrieved July 29, 2025, <https://books.google.com/books?id=dmgIAAAAQAAJ>).
- , 1819, "J. G. Rhode, *Über den Anfang unserer Geschichte und die letzte Revolution der*

- Erde* の書評, "Jahrbücher der Literatur" VIII: 413–68, (Retrieved July 29, 2025, <https://books.google.co.jp/books?id=dmgIAAAAQAAJ>).
- Schnapper, Dominique, 1994, *La communauté des citoyens sur l'idée moderne de nation*, Paris: Gallimard. (中嶋洋平訳, 2015, 『市民の共同体：国民という近代的概念について』法政大学出版局。)
- 清水克洋, 1981, 「産業革命期フランスにおける労働者の貧困問題——ヴィラルメ調査報告の検討を中心に」『京都大学経済學會』127 (2・3) : 111–32。
- Sieyès, Emmanuel-Joseph, 1789, *Qu'est-ce que le Tiers-État?*, (Retrieved July 29, 2025, <https://books.google.com/books?id=L0cUAAAAYAAJ>). (稻本洋之助・伊藤洋一・川出良枝・松本英実訳, 2011, 『第三身分とは何か』岩波書店。)
- 清水忠重, 1981a, 「アメリカ人種学派の奴隸制擁護論」『論集』神戸女学院大学, 27 (3) : 41–62。
- , 1981b, 「アメリカ人種学派の科学——その疑似性にかんする一試論」『論集』神戸女学院大学, 28 (2) : 57–77。
- Stoler, Ann Laura, [2002] 2010, *Carnal Knowledge and Imperial Power: Race and the Intimate in Colonial Rule*, new preface edition, University of California Press
- 高橋達郎, 2002, 「シュレーベルの言語有機体説」京都女子大学人文学会 編『人文論叢』50 : 61–93。
- 田中拓道, 2004, 「フランス福祉国家の思想的源流（1789–1910 年）(2) ——社会経済学・社会的共和主義・連帯主義」『北大法学論集』55 (4) : 175–232。
- 寺田和夫, 1967, 『人種とは何か』岩波書店。
- Thierry, Amédée, 1828a, *Histoire des Gaulois tome 1* Paris: A. Sautelet et Cie, (Retrieved July 29, 2025, <https://books.google.co.jp/books?id=a7RSF91C5CoC>).
- , 1828b, *Histoire des Gaulois tome 2*, Paris: A. Sautelet et Cie, (Retrieved July 29, 2025, <https://books.google.co.jp/books?id=b5XO9eRQBzYC>).
- , 1828c, *Histoire des Gaulois tome 3*, Paris: A. Sautelet et Cie, (Retrieved July 29, 2025, <https://books.google.co.jp/books?id=pZHUrhrKuwIC>).
- Thierry, Augustin, 1825, *Histoire de la conquête de l'Angleterre par les Normands tome 1*, Paris: Fonderie de Firmin Didot père et fils, (Retrieved July 29, 2025, <https://books.google.com/books?id=RGdiAAAACAAJ>).
- , 1825, *Histoire de la conquête de l'Angleterre par les Normands tome 2*, Paris: Fonderie de Firmin Didot père et fils, (Retrieved July 29, 2025, <https://books.google.com/books?id=9GUOAAAQAAJ>).
- , 1825, *Histoire de la conquête de l'Angleterre par les Normands tome 3*, Paris: Fonderie de Firmin Didot père et fils, (Retrieved July 29, 2025, <https://books.google.com/books?id=WVIOAAAQAAJ>).
- , [1825] 1826, *Histoire de la conquête de l'Angleterre par les Normands tome 4*, 2ed., Paris: Fonderie de Firmin Didot père et fils, (Retrieved July 29, 2025, <https://archive.org/details/histoiredelaconq04thieuoft>).
- 富永茂樹, 1985, 「道德と統計——社会調査史論」, 阪上孝編著『国家装置と民衆』ミネルヴア書房, 119–48。

人種という境界

- US Census Bureau, [2018] 2021, Decennial Census of Population and Housing Questionnaires & Instructions, (Retrieved July 29, 2025, https://www.census.gov/programs-surveys/decennial-census/technical-documentation/questionnaires.2020_Census.htm).
- Villermé, Louis-René, 1840a, *Tableau de l'état physique et moral des ouvriers employés dans les manufactures de coton, de laine et de soie. tome 1*, Paris: Chez Jules Renouard et Cie, libraires, (Retrieved July 29, 2025, <https://books.google.com/books?id=PZIAYyNYFPMC>).
- _____, 1840b, *Tableau de l'état physique et moral des ouvriers employés dans les manufactures de coton, de laine et de soie. tome 2*, Paris: Chez Jules Renouard et Cie, libraires, (Retrieved July 29, 2025, <https://books.google.com/books?id=IIwOAAAAQAAJ>).
- Virey, Julien-Joseph, 1824, *Histoire naturelle du genre humain tome 1*, Paris: Crochard. (Retrieved July 29, 2025, <https://books.google.co.jp/books?idnOCLMJ7B8KgC>).
- Watkins, Calvert, 2015, "Aryan," *American Heritage Dictionary of the English Language*, 5th ed., New York: Houghton Mifflin, 102.
- Wright, Michelle M., 1999, "Nigger Peasants from France: Missing Translations of American Anxieties on Race and the Nation," *Callaloo*, 22 (4): 831-52.
- Young, Thomas, 1813, "Mithradates, oder allgemeine Sprachenkunde," *The Quarterly Review* 10: 250-92, (Retrieved July 29, 2025, <https://books.google.com/books?id=DNT4cH0-3v4C>).

* 本稿は、2024年度東京経済大学個人研究助成費（研究番号 24-34）に基づく研究成果の一部である。